ISSN 1346-0382

SGRAレポート No.0042

第2回SGRAチャイナ・フォーラム

黄土高原緑化協力の１５年

～無理解と失敗から相互理解と信頼へ～

Sekiguchi Global Research Association

SGRA 関口グローバル研究会

■ フォーラムの趣旨

2006 年 10 月に北京大学で開催したパネルディスカッション「若者の未来と日本語」に引き続き、中国で開催する２回目のＳＧＲＡフォーラム。今回は、既に 15 年間、中国山西省大同市の黄土高原で緑化運動を続けている日本の認定ＮＰＯ法人「緑の地球ネットワーク」事務局長の高見邦雄様にご講演いただきます。日中同時通訳付き。ＳＧＲＡでは、中国各地で活動を続ける民間人による公益活動を、北京大学をはじめとする中国各地の大学で紹介するフォーラムを開催していきたいと思っています。

■ＳＧＲＡとは

ＳＧＲＡは、世界各国から渡日し長い留学生活を経て日本の大学院から博士号を取得した研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化にたちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。ＳＧＲＡは、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがＳＧＲＡの基本的な目標です。

■ＳＧＲＡかわらばん

ＳＧＲＡフォーラム等のお知らせと、世界各地からのＳＧＲＡ会員のエッセイを、毎週２回（火・金）、電子メールで発信するメールマガジンで、どなたにも無料でご購読いただけます。購読後希望の方は、ＳＧＲＡ事務局にご連絡ください。

プ ロ グ ラ ム

第２回ＳＧＲＡチャイナ・フォーラム

黄土高原緑化協力の 15 年

―無理解と失敗から相互理解と信頼へ―

講演：高見邦雄（緑の地球ネットワーク事務局長）

主　催：　関口グローバル研究会（ＳＧＲＡ）
協　力：　緑の地球ネットワーク（ＧＥＮ）
　　北京大学日本言語文化学部
　　新疆大学化学学院
協　賛：　国際交流基金北京事務所
　　（財）渥美国際交流奨学財団

＜北京大学フォーラム＞
日　時：　２００７年９月１４日（金）午後２時～５時
会　場：　北京大学生命科学学院報告庁

＜新疆大学フォーラム＞
日　時：　２００７年９月１７日（月）午後２時～５時
会　場：　新疆大学図書館二階報告庁

■　講演要旨

緑の地球ネットワークは 1992 年以来、山西省大同市の農村で緑化協力を継続している。大同市は北京の西 300km ほどのところにあり、北京の水源、風砂の吹き出し口でもある。そこで深刻な沙漠化と水危機が進行している。「ゼロからの出発」とよく言うが、歴史問題をかかえた大同ではマイナスからのスタートだった。初期は失敗続きだったが、その後、日本側の専門家や中国のベテラン技術者の参加を得て、だんだんと軌道に乗ってきた。協力の双方も失敗と苦労を通じ、お互いを理解し、信頼仕合うようになってきた。いまでは「国際協力の貴重な成功例」とまで評価されるようになっている。その経験と教訓を話したい。

■　講師略歴

1948 年鳥取県の農家に生まれる。東京大学中退。日中民間交流に従事したあと、1992 年緑の地球ネットワークの設立に参加し、大同プロジェクトを担当。1994 年から事務局長。毎年 100 ～ 120 日、大同に滞在している。友誼奨（2001 年、中国政府）、大同市栄誉市民（2006 年、大同市政府）など受賞。中文の著書に『雁棲塞北～来自黄土高原的報告』（李建華・王黎傑訳、国際文化出版公司、2005 年）がある。

北京大学フォーラム

SGRA
主　办：
协　办：
赞　助：

欢迎参加第２届ＳＧＲＡ中国论坛
黄土高原绿化合作 15 年
～从不理解与失败到相互理解与信任～
演讲人：高见邦雄
主　办：
协　办：
赞　助：

主　办：
协
赞

主　办：
协　办：
赞　助：

新疆大学フォーラム

合作15年——从不理解与失败到相互理解与信任

绿化合作15年——从不理解与失败到相互理解与信任

化合作15年——从不理解与失败到相互理解与信任

新聞掲載記事

第二届 SGRA(关口国际研究会)中国论坛在乌鲁木齐举办

【本报讯】记者米丽班·买买提明　由关口全球研究会(SGRA)主办，日本绿色地球网络(GEN)、北京大学日本语言文化系、新疆大学化学化工学院协办的第二届 SGRA(关口国际研究会)中国论坛之新疆大学论坛于 9 月 17 日在新疆大学举办。论坛上，SGRA(关口国际研究会)事务局局长高见邦雄先生给广大师生和专业人士做了《黄土高原绿化合作 15 年：从不理解与失败到相互理解与信任》的精彩演讲。

SGRA(关口国际研究会)是以长期留学日本并在日本的大学获得博士学位的世界各国研究人员为中心组建的，研究旨在为挑战全球化的个人或组织制定方针和战略时提供有益的帮助。

新疆经济报　２００７年9月２１日

ياپونىيە گۇاڭكۇ يەر شارى تەتقىقات جەمئىيىتىنىڭ 2 ـ نۆۋەتلىك جۇڭگو مۇھاكىمە مۇنبىرى ئۈرۈمچىدە ئۆتكۈزۈلدى

سۈرەتلىك خەۋەر

ياپونىيە گۇاڭكۇ خەلقئارا تەتقىقات جەمئىيىتى (SGRA) ئۇيۇشتۇرغان، ياپونىيە يەر شارىنى كۆكەرتىش تورى (GEN)، بېيجىڭ ئۇنىۋېرسىتېتىنىڭ ياپون تىلى مەدەنىيەت فاكۇلتېتى، شىنجاڭ ئۇنىۋېرسىتېتى خىمىيە سانائەت ئىنستىتۇتى ھەمكارلاشقان، ياپونىيە خەلقئارا ئالماشتۇرۇش فوند جەمئىيىتىنىڭ بېيجىڭ ئىش باشقارمىسى بىلەن ياپونىيە ۋومى خەلقئارا ئالماشتۇرۇش ئۇيۇشمىسى ياردەم بەرگەن ياپونىيە گۇاڭكۇ يەر شارى تەتقىقات جەمئىيىتىنىڭ 2 ـ نۆۋەتلىك جۇڭگو مۇھاكىمە مۇنبىرى 17 ـ سېنتەبىر ئۈرۈمچىدە ئۆتكۈزۈلدى.

مۇنبەردە ياپونىيە يەر شارىنى كۆكەرتىش تورى (GEN) تەشكىلاتىنىڭ ئىشخانا مۇدىرى تاكامى كونىئو ئەپەندى «سېرىق توپىلىق ئېگىزلىكتىكى 15 يىللىق كۆكەرتىش ھەمكارلىقى ـ چۈشىنىشمەسلىك ۋە مەغلۇبىيەتتىن ئۆز ـ ئارا چۈشىنىش ۋە ئىشىنىشكىچە» دېگەن تېمىدىكى ئىلمىي دوكلاتنى بەردى. ياپونىيە يەر شارىنى كۆكەرتىش تورى (GEN) ئاساسلىق شەنشى ئۆلكىسىنىڭ داتوڭ شەھىرىدىكى 1992 ـ يىلدىن بۇيانقى قاقاسلىقنى كۆكەرتىش ئەھۋالىنى تونۇشتۇردى.

بۇ مۇنبەرنىڭ ئۈرۈمچىدە ئۆتكۈزۈلۈشى چەت ئەللەردىكى خەلق تەشكىلاتلىرىنىڭ شىنجاڭنى چۈشىنىشىگە ئەمەس، قولىنىڭ ئالدىنى ئېلىپ، شىنجاڭنىڭ ئېكولوگىيىسىنى ياخشىلاشقا ئوخشاش يەر شارى خاراكتېرلىق ھەمكارلىق تېمىلىرىغا مەبلەغ ۋە ئەقلىي كۈچ جەلپ قىلىپ، چەت ئەللەردىكى تېخىمۇ كۆپ خەلق تەشكىلاتلىرىنىڭ دىققىتىنى شىنجاڭغا مەركەزلەشتۈرۈشكىمۇ پايدىلىق.

شۇ كۈندىكى مۇنبەرگە ئوقۇتقۇچى، ئوقۇغۇچى ۋە دوكتور، ئاسپىرانتلاردىن بولۇپ 300 دەك كىشى قاتناشتى.

سۈرەتتە: مۇنبەر ساھىبخانلىرى ياپونىيە تەرەپ مېھمانلىرىغا دوپپا تەقدىم قىلماقتا.
مۇخبىرىمىز ئۆركەش جاپپار خەۋىرى، فوتوسى

新疆日报　２００７年9月２６日

SGRA 中国论坛在我区召开

本报乌鲁木齐 9 月 17 日讯　记者方云静、实习生邓鑫报道：今天，第二届关口全球研究会(SGRA)中国论坛在新疆大学召开，绿色地球网络事务局局长高见邦雄以《黄土高原绿化中日合作 15 年》为题，向新大 300 多名学子作了演讲。

论坛由关口全球研究会主办。SGRA 是以长期留学日本并在日本的大学获得博士学位的来自世界各国研究人员为中心组建的。其研究宗旨在于为勇于挑战全球化的个人或组织制定方针和战略时提供有益的帮助，并将其研究成果以论坛、报告书、网页等形式公诸于社会。绿色地球网络是 1992 年以来在山西省大同市黄土高原进行绿化活动的日本非营利、非政府民间组织。

高见邦雄介绍了中日两国在大同市进行绿化活动时从不理解与失败到相互理解与信任的过程。他希望能够和新疆有关部门合作，为新疆水土流失防治尽一分力。

SGRA 计划在北京大学及中国各地大学举办各种论坛，广泛介绍日本民间人士在中国各地开展的公益活动。

新疆日报　２００７年9月１８日

挨拶

開会挨拶

孫　建軍

北京大学日本言語文化学部助教授、ＳＧＲＡ研究員

本日は足元の悪い中、皆さんにお集まりいただき、まことにありがとうございます。会場にはたくさんの分野の方がいらしてます。もちろん学生もいれば社会人の方もいらっしゃいます。日本語専攻の私の教える学生の皆さんも来ていますし、非日本語専攻の方もいらしているようです。もちろん日本人の留学生の方も来ておられます。そして、わざわざ海外からお越しいただいた方もいらっしゃいますので、皆様のご協力に対し心より感謝いたします。まずは、今回のフォーラムの実現を可能にしたお二方に感謝の意を表したいと思います。渥美国際交流奨学財団の渥美伊都子理事長と国際交流基金北京事務所の小島寛之副所長です。ありがとうございます。

このフォーラムがここ北京大学日本言語文化学部で開催されることになったのは、私が日本に留学していた時代にこのフォーラムの協賛となっている渥美財団から奨学金を１年間いただいたことがきっかけです。渥美奨学生には様々な分野の学者の卵、あるいは既に学者としてその地位を確立できた若手の研究者たちが選ばれています。奨学生の集まりはいつもアットホームな雰囲気の中ですが、各分野の最新情報の交換の場でもありました。この大家族に参加できたことを今でも誇りに思っています。そして奨学生たちによって結成されたＳＧＲＡ（関口グローバル研究会）は、身の回りのものや現象から出発し、国際的かつ学際的なアプローチによって問題解決につなげようとしています。そのような活動が中国でも紹介できればとの願いを込めて、昨年「若者の未来と日本語」をテーマに初めてのＳＧＲＡフォーラムをここ北京大学で開催いたしました。

本日は２回目のフォーラムですけれども、そのテーマは「黄土高原緑化協力の 15 年」です。中国では毎年３月 12 日の植樹節（木を植える祭）前後になると、テレビではピカピカの、たまには真っ赤なリボンが付いているスコップを持って既に植えてある木に土を添える偉い人の映像が目に付きますけれども、ショーだけで終わってしまうというのが正直な感想です。環境保護は社会的な問題になって久しいですけれども、北京在住の方から見れば、改善どころか一部では悪化していることもまた事実です。そんな中で緑の地球ネットワーク（ＧＥＮ）を始めとした民間団体の努力は注目すべきでしょう。サブタイトルに「無理解と失敗から相互理解と信頼へ」とありますように、15 年間の道のりは短くありません。ここには数多くの物語が秘められていることと思います。ＳＧＲＡ研究員のメンバーとして高見邦雄事務局長のご講演を大いに期待しています。

一方、私の本職は日本語教員です。教員として日本語専攻の学生の皆さんにも考えていただきたいのです。それは日本語だけに集中するのではなく、もっと全面的に自己向上を図らなければならないということです。日本語学部主宰の本日のフォーラムがなければ、恐らく日本語専攻の皆さんは参加することがないかもしれません。高見さんのご講演が皆さんにとって日本語で緑化の問題、草の根交流、それから協調性などについて深く考える機会になればと期待しております。深く考えることによって日本人の発想や日本の文化等が見えてくるだけではなく、自国文化の再確認や反省にもつながることでしょう。そういう意味で皆さん、講演の後で何かご質問がありましたらどんどん発言してください。アンケートもよろしくお願いします。

挨拶

来賓挨拶

小島　寛之

国際交流基金北京事務所副所長

本日は、このような立派な講演会が開催されますことにまずお祝いを申し上げたいと思います。私ども国際交流基金は日本と外国との文化交流を進めて国民と国民の間の相互理解を深めることを目的に、1972 年に設立された日本の政府関係機関でございます。今回は「非常に良い企画だ」ということでささやかながらサポートをさせていただいております。私どもにとっても大変にうれしいことでございます。

本日は高見事務局長から「黄土高原緑化協力の 15 年」と題しましてご講演をいただくわけですが、長い期間にわたる貴重な取組みにかかわる素晴らしいお話が聞けるのではないかと期待しております。環境問題というのは中国のみならず日本にとってもこれから大変重要性を増していく問題でございます。高見事務局長を始めとするネットワークの皆さんの取組みというのは環境改善に貢献するのみならず、日本と中国の相互理解、草の根交流に非常に貢献をしている活動ではないかと思っております。

今年は日本と中国の文化、スポーツ交流年に当たっております。私どももいろいろな活動を通じて日本と中国の皆さんの交流をますます進めていきたいと思っております。今回のフォーラムの実現に大変なご尽力をいただきました孫先生をはじめ渥美財団の皆様に敬意を表するとともに、今回は特に若い学生の皆さんが高見事務局長のお話からより多くのことを学ばれますことを期待しまして、簡単ではございますが私の挨拶に代えさせていただきます。

講演

黄土高原緑化協力の 15 年

―無理解と失敗から相互理解と信頼へ―

高見　邦雄

緑の地球ネットワーク事務局長

「緑の地球ネットワーク」が山西省大同市の農村で緑化協力をスタートさせたのは 1992 年 1 月ですので、まもなく満 16 年になります。最初にこの地方の砂漠化や水不足の現状、それから私たちがどういうことをやってきたかについて、スライドを使って簡単にご紹介したいと思います。

大同市北部の陽高県にこういう民謡があります（図 1）。「山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし。十の年を重ねれば九年は旱（ひでり）で一年は大水」というんですけれども、私も 16 年間通ってきまして、全くの実感です。毎年のように旱魃になります。今年も私は 8 月 24 日まで大同にいたのですけれども、ほんとに雨が降らないのです。

私たちの代表的なプロジェクトの 1 つに実験林場「カササギの森」がありますが、ここでは雨らしい雨は 7 月 30 日に 1 回だけ降りました（図 2）。私もその日ここにいたのですが、土の表面から 5 センチぐらい湿っただけです。大同から来たカウンターパートに聞きますと、その後も長く降りませんでした。昨日やっと降ったそうですけれども、もう遅すぎて役に立ちません。今年も大変な旱魃のようです。

これは私が今年の 8 月にホームステイした農家のおじいちゃんです（図 3）。アワ（粟）もキビ（黍）も旱魃でほとんど育っていません。地面が見えなくなるぐらいに茂らないといけないのに、こういう状態です。恐らく今年の収穫はゼロでしょう。それでもあきらめないで、こうやって中耕をして、毛細管を切って、水の蒸発を少しでも抑えようとしているわけです。

最近でいえば、1999 年、2001 年が記録的な大旱魃でした（図 4）。1999 年は建国以来最悪の旱魃だと言っていました。中華人民共和国成立からちょうど 50 年の年ですから、50 年に一度の旱魃

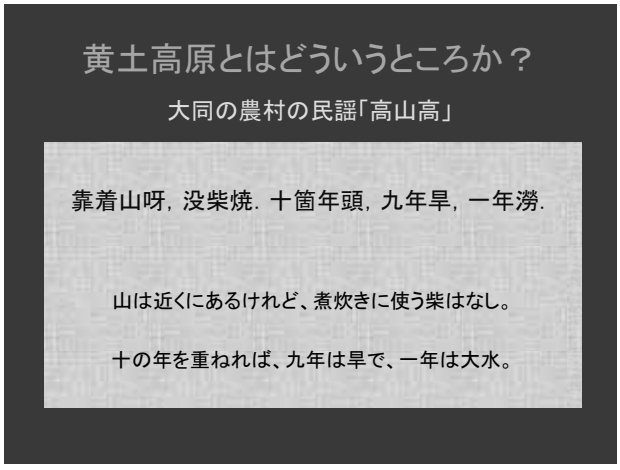


図 1

図 2

と言ってもいいと思います。その翌々年の 2001 年がそれに輪をかけた大旱魃で 100 年に一度の旱魃だと言っていました。今年もそれに並ぶんじゃないかと思って心配しております。私は 1992 年から大同に通っていますが、振り返ってみると旱魃の年が 93 年、95 年、97 年、99 年、2001 年、そして 2007 年。奇数年でいい年はありません。今年も奇数年です。

大旱魃の年の冬に農村を回って、こういう光景に出合いました。女性が左手に持っているものはジャガイモからでんぷんを搾った搾りかすですけれども、これをお粥に混ぜて食べるといいます。栄養は残っていないでしょうけれども、ひもじさを抑えるために食べるというのです。

それから井戸が枯れる、湧き水が枯れる村が続出しています。1997 年の夏、テレビ朝日の「素敵な宇宙船地球号」という番組の取材クルーがやってきたので、私も一緒に農家に泊まりました。朝、洗面器の底にワンフィンガーぐらいの水が用意され、私たち 4 人が交替で顔を洗いました。洗うというより顔を湿らせるくらいのものですね。私が最後に顔を湿らせて、残った水を庭に撒こうと思って玄関を出たら、その家の主が慌てて飛んできました。撒いちゃいけないというのです。でも、止められなくても分かりましたよ。その家で飼っているヒツジやニワトリが駆け寄ってきたからです。洗い物をした最後の水が家畜の飲み水になるのは水の乏しい農村では普通のことです。

そのような状態を見過ごすことができなくて、私たちはその村ともう 1 つの村で井戸を掘るのに協力しました。この村は 176 メートル、もう 1 つの村は 183 メートルで、幸い水がでました。通水式のときに老人が私の手を握って離さないのです。「見てくれ。こんなきれいな水は飲んだことはもちろん見たこともない。もらい水に通う村の歴史に終止符が打たれた」と言って、おじいちゃんが大泣きするのです。私もついもらい泣きしてしまいました。

農村はそれくらい干上がっているのです。そういうなかで井戸掘りに協力したことは、私自身にとって大きな教訓をもたらしました。黙って通り過ぎるだけだったら問題の深刻さに気付かなかったでしょうけど、井戸を掘ることで「水問題が大事だ。水がキーワードだ」という感覚を持ちました。そうやって注意して見ますと、大同中の河という河、ダムというダムが干上がっているのです。

これは大同の中央部を流れる桑干河の今年の夏の様子です（図 5）。一滴の水もありません。

その少し上流の応県の光景です（図 6）。数年前のものですが、実に衝撃的な写真なのです。遠くに見えているのは橋で、トウモロコシが生えている所はみな桑干河の河底です。その全面にトウモロコシが植えられて水の流れる余地がない。付近の農民は河に水が流れてくることを期待もしていなければ恐れてもいないわけです。そして実際に収穫まで水が流れてこなかったのです。河底ですから普通の畑に比べ土が肥えていますし、水分にも恵まれているので、普通の畑よりできが良いのです。

そしてこれは同じ場所の反対側の岸です（図 7）。1992 年のもので 10 年少し前の写真です。このときにはちゃんと水がありました。河の岸にポプラを植えるのに私たちも協力したのですけれども、植えた木の根元が洗われるくらい水が流れていたのです。かなり急速に水がなくなっています。

これは大同の市街地の東の外れにある御河で、先ほどの桑干河の最大の支流です（図 8）。でもよく見てください。堰を作って人工的に水を貯めているわけです。だから橋の両側には水がありますが、ほかのところは干上がっています。せき止められて動かない水ですから腐ってしまって、今年の夏は橋の上まで悪臭がありました。最大の支流に水がないんですから、本流の桑干河が干上がるのも不思議ではありません。

旱魃で収穫は期待できないが、老人は朝早くから中耕作業にでかけてきた。

図３

100年に1度といわれる2001年の大旱魃。作物がまったく育たなかった。

図４

大同の中央部を流れる桑干河。2007年夏は１滴の水もなかった。

図５

桑干河の川底の全面がトウモロコシ畑になり、水の流れる余地がない。

図６

前の写真と同じ場所の12年前の写真。水が川岸をえぐった跡がある。

図７

桑干河最大の支流である御河。水をためてプールにしている。

図８

広い中国ですから、そういう地方があっても不思議ではないし、気に留める必要もないかもしれないですね。でも、そうはいかないのはこの大同が北京の水源だからです。桑干河は東に流れて河北省に入り、洋河、壺流河と合流して永定河と名前を変えます。その永定河をせき止めているのが官庁ダムです。この官庁ダムと密雲ダムは北京に２つしかない水がめです。ですから大同は北京の水源と言ってもいいんですね。

これは永定河が官庁ダムに流れ込む直前の写真です（図９）。２年ほど前のものですが、この鉄橋の長さは 1.5 キロ近くあります。実際に水が流れているのは 10 メートルほどで、底が見えていますね。その他のところはトウモロコシ畑になっています。丁玲という女流作家が『太陽は桑干河を照らす』という有名な小説を残しましたが、もし彼女が生きていたら『太陽はトウモロコシ畑を照らす』になるでしょう。

これは官庁ダムの北側ですが、北側の方が傾斜は緩やかです（図１０）。1950 年代には一番手前のところまでダムの底で、水があったそうです。ところが今、水際は１キロ以上後退しており、干上がった湖底はブドウ畑やリンゴ畑になっています。

これは北京のビルの屋上の看板ですけれども、「水…明日もあるだろうか」と書いてあります（図１１）。

それからもう１つ新しい事情が発生しています。今年の５月 10 日に北京市水務局の副局長が記者会見をして、オリンピックを迎えるための北京の水対策を発表し、日本のテレビや新聞でも報道されました。河北省の石家荘と北京との間の南水北調の工事を急いでやって、太行山のふもとにある４つのダムの水を北京に運んで、それでオリンピックを乗り切ると言います。来年４月のスタートだそうですけど、オリンピックは８月ですからギリギリのタイミングです。年間に３億トンから４億トンの水を運ぶ予定で、影響を受ける農村への補償などをこれから検討するそうです。

大同市の南部に渾源県、霊丘県があり、そこを唐河が流れています（図１２）。この河は太行山を抜け河北省に流れ出ますが、そこに西大洋ダムがあります。このダムは先ほどの４つのダムの１つです。それ以外の３つのダムの集水域も大同と近いところにあります。ですから、これまでは大同の北部は桑干河を通じて北京の水源だったんですけれども、来年４月以降は大同の南部も北京の水源になるわけです。ですから決して水の乏しい気の毒な一地方の話ではなく、この北京とも密接な関係を持つことを最初に理解していただきたいのです。

そのことと関連して今大変なことが起こっていると思います。私たちは今年の夏、日本から来た植物の専門家と一緒に太行山の植生調査をやりました。私は４日連続で歩いたんですけど、その４日とも山で重機の音を聞きました。そしてどこでも鉱山用の大型ダンプとすれ違いました。

これは碣寺山の近くの１つの峰で太行山に属しています（図１３）。山頂をスーパーショベルで削り取っていますが、これは鉄鉱石の鉱山です。

これは太白維山ですが、ここにはマンガン鉱があります（図１４）。太行山に地下資源があることは従来から知られていたのですけれども、個々の規模が小さく分散していること、交通が不便なこと、開発資金がないということで手つかずでした。ところが最近の中国経済の大膨張で鉄が足りない、セメントが足りない、何もかも足りないとなってきました。小規模でも採算ベースに乗るということで、一斉に開発が始まったのです。霊丘県はこれまで国家級の貧困県でしたが、最近は資源開発で沸き立っています。まさに千載一遇のチャンスで、このチャンスを逃すわけにはいかないという気持ちは分かります。

官庁ダム注入直前の永定河。たくさんの架線が合流しているのに水がない

図９

北京の水ガメの官庁ダム。近年急速に水が減っている。右側の水道橋に注意。

図１０

明日もまだあるだろうか？　北京のビルの屋上の看板。

図１１

太行山脈をぬって流れる唐河。やがて北京市民の飲用水となる。

図１２

太行山のなかにある鉄鉱石採掘場。痛々しいまでに山が壊される。

図１３

マンガンの鉱山。残土で谷を埋めているが雨になれば土石流になる。

図１４

開発の資本は浙江省、江蘇省など南方からきているようです。実際に働いている人も四川省とか陝西省とか外から来た人が多くて、地元の人は少ないそうです。太行山にとっては地下資源があったことが不幸なんですね。そうでなかったらここまで傷つけられることはなかったでしょう。また長い目で計画的にやられたら、インフラの整備ももっと丁寧だったでしょう。この夏も山西省の中部では 2 時間で 180 ミリといった豪雨があったんですけれども、そんな雨が降ったらこのマンガン鉱山はひとたまりもありません。ふもとの村まで土石流が一直線でしょう。また開発しているのが地元の人間だったらここまでの無茶はしないでしょう。

そしてマンガンは人体にとって有毒です。地下深くにあるときは問題なかったとしても、こうして地上に掘り出すと雨のたびに毒を流すことになります。その水は最終的には先ほどの唐河に流れ込む。そういう関係です。

随分脇道に逸れましたので話を元に戻します。先ほどの民謡に「十の年を重ねれば九年は旱で一年は大水」とありましたが、この大水とはなんでしょう。1995 年が典型的な年です。この年も春は大旱魃だったのですが、7 月末から降り出してなかなか止みませんでした。その雨水が土造りの窯洞（やおとん）の屋根や壁に滲み込んでどんどん潰れたんです。大同の農村では 6 万世帯 24 万人が被災したと言われます。

これほどのことが 10 年に一度もあったらたまりませんけれども、大同の場合、雨は 6 月中旬から 8 月中旬くらいに集中します。年間降水量は平均 400 ミリほどですが、その 3 分の 2 がそこに集中します。先ほどの民謡に「山は近くにあるけれど煮炊きに使う柴はなし」とあったように山に木はほとんどありませんし草もまばらです。

先ほどの民謡はたった 16 文字の漢字で表されています。すごいことですね。中国のご先祖の偉大なる発明だと思います。私たち日本人も随分お世話になっていますが、できの悪い学生の私としては、あんなに複雑なものが入ってこなければ良かったと思うこともないわけではありません。ところが最近、徳村彰さんという日本人が 1 つの字を作りました。森の字は木が 3 つですが、上の木はそのままで、左下に水、右下に土を書き、これで「もり」と読ませるわけです。その意味を考えますと、木があるから水と土が守られ育まれる、そして木は水と土の上に成立するということです。黄土高原の場合は、この木が早くに失われ、そのために水と土が失われ、水と土が失われたところに木を育てようとするのですから困難があって当然なのです。そういうことから言いますと「環境は壊してしまったら大変だよ、一旦壊したところを修復するのは至難の業だから決して壊してはいけない」ということを、この 1 つの文字で表していると私は思います。

これは Google Earth による人工衛星からの画像で、私たちの実験林場の周囲を見ていますが、現場で見るとこういうことです（図 15）。夏の雨によって土壌が侵食されて、谷ができ、畑や山から土が流れ出る。その様子が現場で見る以上に人工衛星の画像にはっきり見えていることが私には驚きです。中国では水土流失といいますね。

なぜこんなことが起こるかと言いますと、先ほど 2 時間で 180 ミリというようなお話をしましたし、私も 1 時間に 70 ミリの雨を何度か体験したことがあります。これは狭い範囲に短時間集中的に降る雨です。そしてここは木も草も乏しいので、雨が直に土の表面を叩き土を流してしまうわけです。するとだんだん土地が劣化し、作物が育たなくなる、植物が育たなくなるわけで、これが黄土高原の砂漠化です。雨が砂漠化を加速するという皮肉な現象が黄土高原では起こっています。

こんな話をしても島国の日本人には実感がないんですね。「雨が土を流すなんて、大したことはなかろう」という感じです。そして、こうやってパワーポイントのスライドを見てもらうために会場を暗

くすると眠くなるわけですね。そこで眠気覚ましのために私は毎回これぐらいのところでクイズを出します。

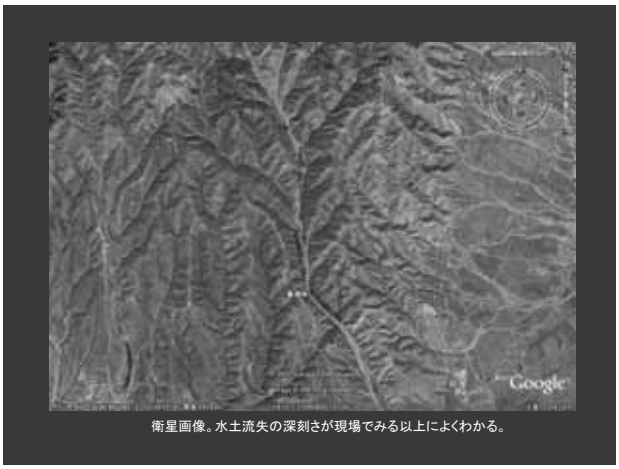
中国政府の発表によると 1 年間に黄河に流れ込む土の量は 16 億トンで、その 80 パーセント以上が黄土高原の土だといいます。この 16 億トンの土で幅 1 メートル、高さ 1 メートルの堤防を築くとその長さはどれぐらいになるかというのがクイズです。大陸のことでスケールが大きいに決まっていますから、物差しの目盛りは赤道 1 周です。次の 6 つの中から正解を選んでください。意味はお分かりですよね？

それではいきます。0.5 周と思う人手を挙げてください。 1 周と思う人は手を挙げてください。 3 周と思う人。 5 周と思う人、10 周と思う人。それでは手を挙げている武隈さん、赤道の周囲はいくらですか？

（武隈）　4 万キロです。

（高見）　さすがですね。それを知らないで手を挙げる人が多いんですけど、武隈さんはよくご存じでした。それでは最後に 30 周と思う人。さすが北京大学ですね。この春に東京大学で 50 人ぐらいの参加者に同じ問題を出したら正解者はゼロでした。東大がいかにだめかが分かります。しかし、その中には中国からの留学生も 10 人以上混じっていたのですけれども正解者がいませんでした。今日の正解者は 1 人です。110 万キロ弱で、赤道の周囲を 27 周することになります。今日の結果をみると島国の日本人が分からないだけではなく、中国人もあまり実感がないようですね。

それでは黄土高原はずっと前から砂漠化の進むひどいところだったかというと、そうではないのです。黄河流域はご承知のように中国で最も早くから文明が発達した所です。山西省の一番南の河東地区は華夏文明の発祥地として有名ですし、一番北の大同も 4 世紀末からほぼ 1 世紀、北魏の都が置かれました。ちょっと信じられませんが、その証拠が例えば雲崗の石窟で 1500 年前に作られたものです（図



衛星画像。水土流失の深刻さが現場でみる以上によくわかる。

図１５

雲崗の石窟。1500年前、大同は北魏の都で世界一の大都市だった。

図１６

岩壁に建立された懸空寺。1500年の風雪に耐えてきた。

図１７

１６）。それから懸空寺、これも５世紀後半の創建です（図１７）。

これは少し時代が下ってますけど、応県の木塔です（図１８）。去年、創建 950 年の式典が開かれたそうで、千年近い年輪を重ねています。世界最大規模の木造建築物で高さは 67 メートルあります。すべて木組みで建てられており、釘は使われていません。そのような高い技術が単独で成立するはずはありません。この辺りにもたくさんの木造建築があり、その粋を集めてこの塔が建てられたということでしょう。森林が存在したことの証明ですね。

そういうことから言っても大同は決して後れたところではないのです。５世紀には人口が 100 万人を超えて中国最大の都市だったそうですし、恐らく世界でも最大の都市で、文化的にも先進地域だったのです。それでは今は後れているのか。そうではないと思います。砂漠化問題に関係する人たちの常套句に「文明の前には森林があり、文明の後には砂漠が残る」というものがあります。大同もその１つの典型なのでしょう。それが事実だとすると、ひょっとすると今も最先頭を走っているのかもしれません。そうでない道を見つけないと、人類の文明には前途がないんじゃないかと思うわけです。

大きな文明が過去に栄えたことと無縁ではないでしょうけど、大同の砂漠化ないし環境悪化の最大の原因は水と土のキャパシティを超えた人間がここに住んでいることだと思います（図１９）。ここで起こっている問題は人口問題と切り離すことができません。人口が多いために本来畑にしてはいけないところまで畑にしてしまいました。このような急斜面に造られた畑を「三つが逃げる畑」と呼びます。水が逃げ、土が逃げ、肥料分が逃げるというわけです。そのような畑を作るために、森林が破壊され草地が壊されてしまったのです。

それから農耕だけでは食べられませんのでヒツジやヤギの放牧をします。ヤギはどんなに急な岩場でもよじ登って、草や木を食べますね。大同で一緒に仕事をしているカウンターパートの技術者は「100 人の人間が植えた木を 100 頭のヤギが台無しにする」と言っていますが、ひょっとするとそれ以上の害をもたらしているかもしれません。

それから先ほどの歌に「煮炊きに使う柴はなし」とありましたが、大同は石炭の産地ですので農村でも割と石炭を使っているのですけれども、交通の不便な山の中の村ではやはり山の木を使います。それが植生を貧しくさせ、環境を破壊してきたわけです。

この十数年を振り返りますと、先ほどの放牧にしても従来よりは少なくなり、柴刈りもだんだん少なくなってきました。それに伴って緑がだんだん濃くなってきて喜んでいたのですけれども、最近の問題は石炭が急激に値上がりしたことです。2000 年ご

図１８

図１９

ろに１トン 60 元だったものが、去年の年末は１トン 450 元です。６年で 7.5 倍にもなりました。そうすると山に入って木を切る人が増える。たばこの火の問題もあるので、林業関係者は随分そのことを心配しています。石炭の値段が上がることで環境に対する負荷が強まるわけですね。問題がすべて連関していることを感じます。

それから貧しい農村ほど子供の数が増えます。日本から来た人たちは「えっ、中国は１人っ子じゃないの？」と言って驚きますけれども、農村では実質的には２人っ子政策ですね。それでもそれ以上の子供がいます。なぜかというと、黄土丘陵の上の方にある村は農家一戸当たりの耕地が広いのです。生産性が低いので広くなかったら生きていけません。下の方の盆地の村であれば、ウマ、ウシ、ロバ、ラバといった大家畜を飼って農耕に使うこともできるわけです。しかし上の方の村ではそういう大家畜を飼うことができなくて、全部人力で耕します。

それから水くみ（図２０）。井戸は大体、侵食谷の底にありまして、それを遠い家は２～３時間もかけて水を運びます。私が「えっ、水くみにそんなに時間をかけるの？」と驚くと、その家の人に「生きていく上で一番大事なことに時間をかけるのが何がおかしい」と言われました。正にそのとおりでございます。「忙しい、忙しい」と言いながら、私たちが生きる上で不可欠とはいえないことをやっているのに比べると、大変正しいことだと思います。

ついでに話しますと、農家のオンドルに上がって白酒で乾杯を繰り返しながら「あんたたちは何が怖いってカミさんが一番怖いだろう。逃げられるのが怖いんだ」なんて言いますと、「おまえだって一緒じゃないか」と逆襲してきますので、「いや俺は違う。逃げられるのなんか怖くない。怖いのは追い出されることだけだ。だから俺の方がずっと勇敢だ」などとばかなことを言い合っていますけど、家庭内ではそのように女性が強くなっていると思います。しかし筋肉労働となると男の方が強いのです。広大な面積を人力だけで耕さなければいけない、水を担がなければいけないとなると、男手がないと家庭が成り立ちません。どうしても男の子が欲しいから男の子が生まれるまで子供を生み続けようとします。そのために子供の数が増える。こういう構造が続く限りは、「男の子が欲しい」という観念もなくなりません。

中国では清明節（４月５日前後）にお墓参りをします（図２１）。都市は違うそうですけど、この地方の農村では清明節にお墓に参るのは男だけです。女性は参りません。そうすると男の子がいなければご先祖様はお墓参りをしてもらうことができません。

農村の土塀なんかにはスローガンがたくさん書かれていますね（図２２）。計画生育に関するものが多く、「生男生女都一様！」（男も女も一緒だ）と

農村では6人に1人が飲み水に困る。なかには3時間もかけて水を運ぶ村もある。

図２０

清明節のお墓参り。この日に参るのは男の遺族にかぎられる。

図２１

か「女児也是後代人！」（女の子も後継ぎだ）といったものが実にたくさん書かれています。これだけたくさん書かれているということは、そうでない観念が強いということですね。このような貧しさ、生活の厳しさといった実体を残したまま、スローガンと教育で解決しようとしても、できないことだろうと思います。

私は 10 年ほど農村に通うなかで、こういうことを考えるようになりました。ここでの一番の問題は人口問題であって、それが環境破壊と貧困の悪循環を作り出しているということです。人口が増えるから食糧が不足する。条件の悪いところまで耕地を拡大し、森林を壊し草地を壊す。そうすると土壌の侵食がひどくなって土地が劣化する。生産力が低下して貧乏になる。貧乏になると人口が増える。そして農耕だけで食べられないから過剰な放牧を行う。すると燃料や餌も不足する。有機物が不足する。畑が痩せる。こういう悪循環が長く続いてきたということです。ですから、こういうところで砂漠化を止めるためには、その原因を解決しないといけないわけです。その原因をなくすか、なくさないまでも軽減しないことには、砂漠化を止めることはできないと思うのです。

この問題で注意していただきたいのは、悪循環の内部の人が頑張ってもその悪循環から抜け出せないことです（図２３）。簡単に抜け出せるようなら悪循環は最初から成立しません。抜け出せないから悪循環になるわけです。１人の農民が「よし、俺はこの貧乏から抜け出してやる」と決意して何をするかというと、「山の裾の土地が使えるから、あれを開墾しよう」となる。その人がそれによって貧困から抜け出すことはあると思います。だけどそれを村中の人がやったらどうなりますか。結果は見えています。それから先ほど放牧が少なくなったと言いましたが、私が知っているところでも 300 頭だったヤギを 1000 頭に増やした村もあります。一直線にはいかないんですね。循環の内部の人たちが頑張って、自分の努力によって悪循環から抜け出そうとすると、かえって悪循環を強める結果になりかねません。

ですからどうしても外部からの支援が必要だと私は思っています。それは何も外国からである必要はありません。北京にとって大同の農村は水源でありますし、風砂の吹き出し口でもあります。ここの環境が良くなれば北京の人たちもその恩恵を受けます。逆にここの環境が今以上に悪化すると飲む水が危なくなるわけです。ですからもう少しこういう農村に関心を持って、支援をしていただきたいと思います。

次にどんな協力事業を続けてきたかということですが、１つは水土流失の防止と風砂の軽減のために、山や黄土丘陵の上の方に防護林づくりを進めてきました。

図２２

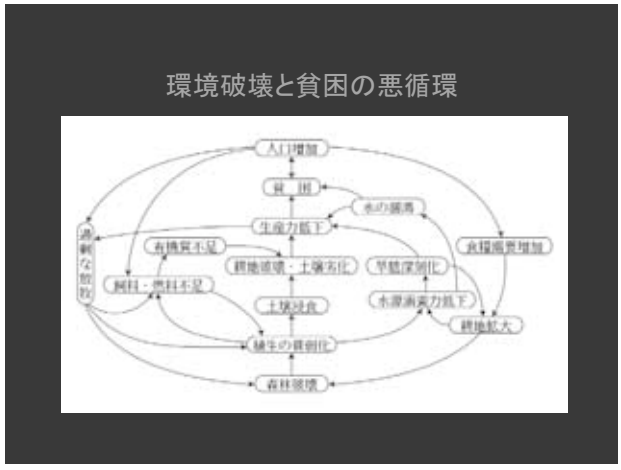


図２３

采涼山プロジェクトは 1999 年から開始しました（図２４）。起工式の写真ですが、その背景を見てください。木は全くありませんし草もまばらです。日本からのボランティアツアーを迎えて 1999 年春に起工式を持ちましたが、実際の整地作業は前年の夏に実施しました。夏の雨が降る７月、８月です。雨の後であれば土が軟らかくて作業が楽ですし、降った雨が整地した溝に溜まり、秋になって気温が下がると蒸発が抑えられ、さらに冬になると土の中に凍結して保存されます。それが翌春、苗が植えられてから気温の上昇とともに融けだして苗を育てるわけです。前年の夏にしっかり整地しておくことが、ここで緑化を成功させるための鉄則です。

采涼山プロジェクトの起工式・草もまばらにしか生えない荒れ地だった

図２４

そして植えます。日本からもボランティアツアーがやってきて、地元の人や子供たちと一緒に植えております（図２５）。

マツを植える。効率と活着率をよくするため、前年の夏にていねいに整地してある。

図２５

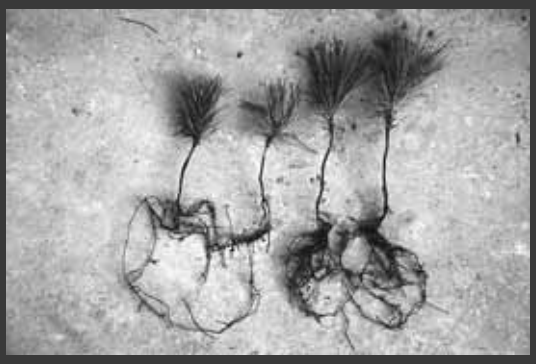
苗は２～３年生の小さなもので、地上部は 10 ～ 15 センチしかありません。日本からのツアー参加者は「えーっ！こんな草のように頼りないもので本当に大きくなるの？」と疑問を隠しません。しかし、この苗には秘密があります。写真の中央にいるのは小川眞さんという私たちの顧問ですが、マツの育苗に菌根菌を活用する実験を指導しているところです（図２６）。菌根菌はキノコやカビの仲間の微生物で、それが植物の根と共生すると生育が良くなり、強くなります。たった４か月でこれぐらいの違いができました。

実際に使ったのは現地のマツ林に生えるアミタケで、胞子の入った土を混ぜて育てたものが右側の２本、左側の２本は普通の苗です（図２７）。これはすごいというので、翌春から実用化して 100 万本単位で苗を育てました。この腰の軽さがＮＧＯの強みだと思います。そうやって育てた苗を最初に使ったのがこのプロジェクトです。

菌根菌をつかった育苗の指導をする日本の専門家。

図２６

最初の数年間は生育が遅くてやきもきさせられ



実験開始後4か月で現れた変化。（右側が処理したもの）

図２７

大きく伸び始めた采涼山のマツ。マメ科、グミ科の灌木を混植している。

図２８

荒れ地を整理して小学校果樹園をつくり、アンズを植える。

図２９

日本の若ものも慣れないスコップを手に、村の人といっしょに汗を流す

図３０

アンズが育ち、満開の花を咲かせた。ここまでに7年かかった（陽高県守口堡村）

図３１

浸食谷の上の畑をおおったアンズ。600haで50万本ある（渾源県呉城村）。

図３２

ますけど、５年を過ぎるころから生長が速くなります（図２８）。今年の夏はこれぐらいになりました。今日もこの会場に来ている緑色地球網絡大同事務所の武春珍所長が最初に手がけたのがこのプロジェクトです。私は 92 年から事業に関わりましたが、最初の数年間のプロジェクトはほとんど失敗ばかりです。ところが彼女は最初から成功です。単に運の良し悪しではなく、こういうところに人間性が表れるんでしょうね（笑）。

２番目の協力内容は小学校に付属果樹園を作ることです（図２９）。地元では「希望果園」と呼んでいます。最初に取り組んだのは霊丘県の農村でした。下寨北という村をたまたま訪ねたんですけど、学校のある時間なのに弟や妹の子守をしたり、両親と一緒に畑に出ている子がいます。そばに寄って「どうして学校にいかないんだ？　行きたくないのか？」と聞くと、「行きたい！」と一言答えて走って逃げる子、何も答えないで下を向いて涙ぐむ子、反応はいろいろですけど、みんな学校に行きたいんですね。日本やこの北京であれば学校になんか行かなくても勉強の手段はいくらでもあります。やる気さえあればいくらでも勉強できます。ところがこれらの農村では農家に本なんてありませんよ。最近まではテレビもなかった。そうすると学校に行かなければ文字を覚える機会もないし、足し算・引き算を覚える機会もありません。友達と遊ぶことさえできないのです。ですから行きたいのです。

学校に行けないのは主として家庭の経済的原因によるものです。失学するのは特に女の子に多いのです。例えば３人の子供がいて下が弟２人だとなると、お姉ちゃんに「もう学校なんて行かなくていい。家にいて手伝いをしなさい」ということになります。全部の子を学校にやるのが難しかったら、男の子が優先されるわけです。農村を歩いていると「文盲は娶るな！」といったスローガンが目につきます。文字の読めない女性は嫁にするなというわけです。勝手なことを言ってるようですけど、これはちょっとひねった表現で、女の子もちゃんと学校にやらないとだめだと書いているんですね。

私たちは緑化を看板にしたＮＧＯですので、いいことだったら何でもいいというわけにはいきません。ない知恵を絞って考え出したのが小学校に付属果樹園を造ることです。そこから得られる収入の一部を学校に回すようにすればお金が回っていくんじゃないかと考えました。青年団の人たちは即座に賛成してくれましたが、村に行ってその提案を説明したら、長老たちの猛反対にあったそうです。「あの憎き日本人からどうして施しを受けなきゃいかんのだ」という気持ちが非常に強かったのです。そのことについてはまた後でお話しします。

このように日本からボランティアツアーが訪れまして一緒に果樹園づくりをやっています（図３０）。若い人たちもいますけれども、スコップなんか日本で持ったことがありません。家族からは「自分の家では植木鉢の花にも水をやらない子がどうしてよその国まで出かけて木を植えるなんてバカなことを考えるんだ」と言われたというんですよ。実際にスコップを持っても力の入れ方が分からないんですね。でも一週間くらい続けると、だんだん腰も入ってきます。「ああ、少しはやれるようになったな」と思うころには帰ってしまいます。ですから労働力としては余り期待はできません。しかしとても大きな仕事をしてくれたと思います。

アンズは植えて７～８年で、これくらいに育ち、満開の花を咲かせます（図３１）。この写真の背景に見えているのは万里の長城で、その向こうは内蒙古自治区です。

これは渾源県の呉城村で、私たちが関係したなかで最も成功した１つです（図３２）。これくらいに育って隣の木同士で枝葉が重なるようになると、大雨が降っても直接地面を叩くことはなくなります。雨は枝や葉で受け止められ、幹を伝って地面に降

り、根を伝わって地中に浸透していきます。ここまで育てばこの地方の最大の問題である水土流失が基本的に防止されるわけです。

ここで植えているアンズの大部分は果肉を食用にするものではなく、種のなかの杏仁を目的にしたものです。杏仁はナッツとして食用になりますし、薬や化粧品の原材料としても使われます。植えて 7～8 年もするとたくさんの実をつけるようになり、従来のアワ、キビ、ジャガイモなどに比べ 5 倍から 10 倍の収入をもたらすようになります。農村の経済的な自立を助けるわけですね。そしてこの村では以前は子供を大学にやるなんて考えもしなかったそうですけど、2000 年に初めて大学生がでて、その後どんどん増えています。そういう意味でも成功例ですね。

それから、これは私も計算外だったのですけれども、アンズは毎年枝を剪定します。その枝が燃料になります（図３３）。これで生活燃料をまかなえれば周りの山を荒らさなくても済むわけで、周囲の環境もよくなります。これまで燃やしていたトウモロコシの茎、アワ、キビの藁、こういったものが堆肥として畑に戻りますので、痩せる一方だった畑の土がちょっとずつでも肥えていきます。アンズを植えることで悪循環が良性の循環に変わるわけですね。

このチャートはまだまだ不十分なもので、可能性の一部を示すものですが、こうしてアンズを植えることで水土流失が軽減されます（図３４）。それから農家の収入が増えると人口増加にストップがかかります。学校に行くのが当たり前になると子供の数が減るのです。学生の皆さんでそのことの意味が分からなかったら、家に帰って両親に聞いてください。あなたたちのためにいかに苦労しているか話してくれると思います。そしてアンズの枝が燃料になることで畑の土や周囲の植生が再生していくわけです。その効果は工業のように劇的ではなく、ゆっくりとではありますが、全体としての環境が再生していきます。環境を壊していくのも循環だったんですけれども、修復の過程も循環のようですね。いま中国政府も環境改善に力を入れており、大同でも様々なプロジェクトを実施中ですから、それらが前進していくなかでどういう変化が表れるか、楽しみでもあります。

第３の事業内容としては、育苗や栽植などの技術的な改善や人材の育成といったソフト面の協力を重視するようになりました。最初に話しましたように 1992 年にスタートしたときは私たちは素人ばかりでした。それはそれでいい面もあって、有名な先生からは「黄土高原なんてやっかいなところだから自分は近づかないようにしてきたのに、君達素人はほんとに勇敢だ。しかしあそこでは木は育たないよ」などと言われたものです。勇敢なのはいいとしても、やはりうまくいかないものですから、日本の専門家の方たちにもお願いして加わってもらった

アンズの枝が燃料になると、周囲に植生が復活し、畑の土も肥える

図３３

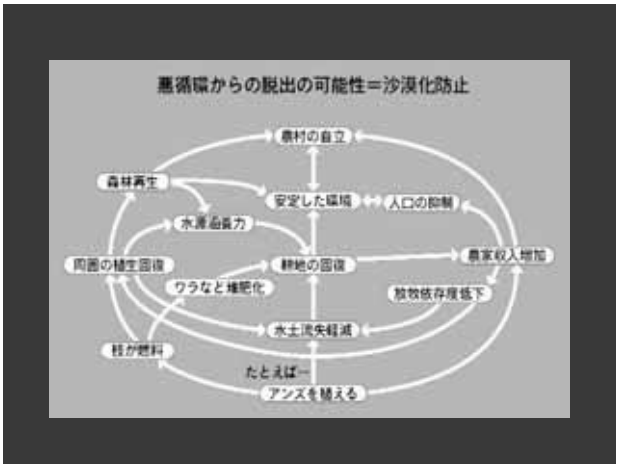


図３４

のです。

1995 年から代表になってくださっている立花吉茂さんです（図３５）。後ろに見えるのは霊丘県の自然林です。中国側でも大同市林業局を定年退職したベテラン技術者に加わってもらいました。それから樹木が大好きで、こと植物のこととなると夢中になって働く地元の農民も加わってくれました。面白い結合ができたんですね。それによってだんだんと仕事がはかどるようになりました。拠点としては大同市南郊区の環境林センター、霊丘県の自然植物園、大同県の実験林場「カササギの森」、「白登苗圃」、実験果樹園「かけはしの森」を建設中です。少しずつ拡大し、充実させてきました。

時間の関係でそのうちの１つだけお話しします。1998 年の夏に大同市の一番南の霊丘県の技術者が「自然林がある。こんな木がある」と言って、一抱え以上のジェスチャーをしました。それだけでは私は信じません。大同に何年も通うなかで「信じるのは自分の目だけ。話だけなら信じてはいけない」と学んできたわけです。「近いか？」と聞くと「すぐそばだ。二里だ」と答えます。中国の一里は 500 メートルですから、二里は１キロです。「じゃあこれから行こう」と言って出かけました。歩いても歩いても着きません。通りかかった村の人に聞くと「遠くない。二里だ」と言いますから、気を取り直して歩くんだけどやはり着きません。この二里が何度も繰り返されるんですね。でも森林があるのは確かなようです。というのは薪を背負って山から下りてきた人に出会ったんですよ。そのなかにナラとかシラカンバとかの枝が入っていました。でもそれがあるのは山を２つ越えた先だと言いますから、その時は諦めて帰りました。そういう空振りを２～３回繰り返したんです。

緑の地球ネットワークの代表・立花吉茂さん　霊丘県の自然林で。

図３５

覚悟を決めてかからないといけないと思って、お弁当を用意して朝早くから出かけました。車が行ける最後の村まで車で行って、そこから片道４～５時間歩いてやっとその自然林に着きました。山の上は道もなくて、藪こぎをしました。確かに自然林があり、なかには一抱え以上の木もあります。あるところにはあるんですね。今年の夏には胸高周囲が 264 センチ、直径にして 80 センチ以上もあるカシワの木を見ましたよ。

最初に見た森林はまだ若いもので、一番太いものでも直径 20 センチほど、樹高は 12 メートルほどでした。生えているのは、ナラ、カンバ、カエデ、トネリコ、シナノキ、クルミなどの落葉広葉樹です。種は違うけど、属のレベルでは日本の北海道、東北などの森林と共通しています。

どういうわけでこのような森林ができたのでしょう。何本か伐って年輪を解析し、周囲を観察した結果、事情が分かりました。1960 年代の毛沢東時代ですけど、ふもとの村に近い所にアブラマツ（油松）を植えたのです。それが 20 年くらいたつと、下枝が燃料として使えるようになります。村に近い所のマツは見事に枝打ちされているんですね。それを背負って持ち帰るわけですね。村の近くで燃料をまかなえるようになれば、山の上まで木を伐りに上がる人はいなくなります。そうすると、そこに自然に森林が成立するわけですね。

私はこの事業に取り組んだころから、黄土高原には昔は森林があった、それを人間が丸裸にしてしまった、だから森林が成立する自然の条件はある、と言ったことをあちこちで話し、書いてもきました。中国の本にそう書いてあったからです。しかし

内心では疑問もありました。これだけ広大なところを人間が丸裸にできるだろうか、森林が成立するだけの条件はもともとないのではないか、中国の本はそう書いているけどウソも多いしね、というような疑問です。この森林を見ることでその疑問が解決しました。どこでもとはいかなくても、森林が成立する条件はあるところにはあるということです。

この自然林からそう遠くない所で 86 ヘクタールほどの山の 100 年間の使用権を購入しました。近くの村と協定して、放牧をしない、薪を取りに入らないと約束してもらいました。約束だけでは安心できませんので、小さな平屋の管理棟を建てて人が常駐するようにしています。そして自然植物園と名づけ、先ほどの自然林や周囲の山から植物の種子を集め、苗に育てて植え広げています。

丸 9 年たったところですが、こういう変化が起こりました（図３６）。写真の左側はリョウトウナラで、この地方の森林の主人公のようです。一番大きなものは既に樹高 10 メートルを超え、胸高直径が 15 センチになりました。このくらいのときの年輪幅は 5 ミリですので、直径は 1 年に 1 センチ太ります。右側はシラカンバです。既に種をつけて天然更新を始めています。

これらの木は毎年葉っぱや枯れ枝を落とします。それが腐葉土になって土を肥やし、土が肥えるから木も大きくなります（図３７）。木が大きくなると落ち葉の量も増えますから、より速く土が豊かになります。土が豊かになるとそれだけ速く木が大きくなる。あるところまで行くと良性の循環に転換します。

今年の夏、東北大学の元植物園長の遠田宏さん、日本森林学会の前会長の桜井尚武さん、岡山大学の吉川賢さん、大阪府立大学の前中久行さんなど名だたる専門家がやってきました。太行山脈のなかの碣寺山に苦労して登ってもらったのです。私たちが 98 年に登った山の続きです。その翌日にこの自然植物園を見てもらったら、「今日これを見るんだったら、あんなに苦労して昨日のところに行く必要はなかったよ。ここを見れば十分じゃない」と言われました。以前は何もなかったところですよ。たった 9 年ですっかり変わってきました。

こういう経験からいうと、森林の成立する条件はあるところにはある、そこで森林がなくなり再生できないでいるのは人間のためだ、人間の影響を取り除けば森林は成立するということが言えると思います。

そして、このように自然に成立する森林には良いことがあります。この地方の最大の課題は水土の保持です。いま大同でたくさん植えているのはマツですが、水土の保持という点からいうと、マツなどの針葉樹よりここに自生している広葉樹のほうが働きが大きいのです。それに、人工的な植林は 1 ～ 2 種類の木しか植えません。多くても数種類ですね。ところがこうやって自然に再生する森林にはたくさんの樹種が混じっています。多様性に富み、病虫

図３６

図３７

害や自然災害に対しても抵抗力があるわけですね。

それから、人工的に植えた樹木はずっと人工的に管理する必要があります。たとえば今植えているマツはこれから何十年も下枝を切ったり、込み入ってきたら間伐したりしないといけないのです。それは植えるのよりずっと大変で、人手もかかるし資金も要するでしょう。それに対して、こうやって自然に再生する森林は人手をかけて管理する必要がありません。弱いものは自然に淘汰され、落ち葉と同じように分解され、ほかの木を育てるわけですね。そういうことから言ってもいいモデルができつつあるわけです。

さて、ここまでが実は前置きで、今日のテーマの話はこれからなのですが、もうほとんど時間が残っていません。それぐらい話が下手で、申し訳ありません。

1992 年１月から山西省の大同で活動を始めることになったのですけれども、誰からも「どういう理由で大同を選んだのですか」と聞かれます。選んだのは私たちではないのです。私たちを最初に紹介した人は当時共青団中央の幹部だった曹衛洲という人です。今では全国人民代表大会常務委員会の副秘書長で、党内序列二位の呉邦国さんの側近として活躍中です。最初に大同に行く前に北京で、「緑化に大変熱心です。美人の産地として歴史的に有名ですし、良い酒もあります」と言われました。それでその気になったわけです。笑いながら聞いている人は冗談だと思っているでしょう。たしかに私の話には冗談が多いんですけど、少なくともこのことだけは事実です。

厳冬の１月に大同市の渾源県に着いて、最初に思ったのは「だまされた！」。美人がいないという意味ではありませんよ。大同のカウンターパートは女性中心ですから、そんなことを口にしたら大同に行けなくなります。

何をだまされたかというと、１つは環境です。先ほどの歌にありましたように雨が降らない。降るとなったらでたらめな降り方をする。こんなところで木を植えるのはいかに大変か。本当にだまされたと思いました。

もう１つは、日中戦争で大変な犠牲を出したところなのに、そのことを教えてくれませんでした。歴史問題がものすごく深刻なところだったのです。最近になって聞いたのですけれども、最初のころ私が村を歩いていると、小学生の男の子が後をつけ、節をつけて歌っていたというのです。「ダーダオリーベン、ダーダオリーベン」。打倒日本、打倒日本ですね。そして小石を拾っては私にぶつけるまねをする。私は気付かなかったのですけれども、気付いたとしても中国語は分からなかったので、意味は分からなかったでしょう。

１９９２年の秋、私は１人で大同の農村に行きましたが、そのとき話せる中国語は「ニイハオ」「シェシェ」「ツァイチェン」「ツースオザイナーリ？」の４つだけでした。最後は「トイレはどこですか？」ですね。それから 16 年もたって、中国語を話せないのは今も同じですけど……。しかし、初期に失敗が多かったのは、その点でもやむを得なかったと思います。そういう関係でうまくいくはずがありません。

それからもいろんなことがありました。橋本紘二さんというカメラマンについて少しお話ししたいのです。1996 年のことですけれども、私たちのツアーが天鎮県を訪れました。昼食を食べた後、彼は一眼レフを４台、首と肩にぶらさげて県城の撮影に出かけました。カメラで日本人だと知れたんでしょうね。１人の老人に呼び止められました。最初は穏やかに話していたそうです。橋本さんも私以上に中国語が分からないのです。そのうちにおじいさんは興奮し激してくる。言葉がきつくなる。それとともに周囲を何十人もの人が取り巻いてきました。その中でおじいさんはだんだん興奮し、ついには橋本さんの鼻先に指を突き付けて罵る。興奮の余り口から泡を吹きだしたそうです。周囲を取り囲んでいる

人たちも興奮してくるし、おじいさんはそれによってまたエキサイトする。

言葉は全然分からないけれども、「戦争のときのことだな」ということだけ橋本さんは分かったそうです。そして「本当に怖かったんだ」と私に言いました。おじいさんはそれほどでもなかったけど、周囲を取り巻いた数十人に恐怖を感じたそうです。彼はプロのカメラマンで、世界中あちこちにカメラを持って１人で出かけるのに、大同に来るときだけは「高見さん、悪いけど空港まで誰か迎えを寄こして北京駅まで送ってくれ」と言いました。それぐらい骨身にしみて怖かったらしいのです。そのとき、私たちの世話をしてくれていた大同の青年旅行社の張紅兵というガイドが、人だかりがしているのを見て、ツアーのメンバーが関係していないか心配して覗き込んだんですね。すると人の輪のまん中に橋本さんが立たされていた。それでおじいさんの話を彼が通訳したのです。

おじいさんが話したのは簡単に言うと「自分の両親も兄弟も日本軍に殺されてしまった。そのとき３歳だった自分は父親の死体の下で生き残った。そういう事実があったのをお前は知っているか？たった３歳で１人きりになった自分がその後どうやって生きてきたかお前に想像できるか」ということでした。橋本さんはそれに対して「済まないことだった」と謝ったんですね。

すると通訳の張紅兵が「おじいさん、最近日本から緑化の協力に来ている人たちがおり、この県にも来ています。あなたはそれを知っていますか？」と聞いたそうです。おじいさんは「知っている」と答えたそうです。張さんが「この人はその１人なのです」と話すと、おじいさんは「それは悪いことをした。自分は何ということをしたんだ」といって、橋本さんのカメラマンジャケットのポケットというポケットに、ヒマワリやカボチャの種を詰め込みました。ほら、中国の人たちはあれをおやつとしてよく食べますでしょ。そのおじいさんは街角であれを売って暮らしを立てていたのです。私はそのお相伴に預かりながら、今のような話を聞きました。

話はそれで終わりません。橋本さんはその後もよく天鎮県に撮影に出かけましたが、そのたびにそのおじいさんが元気でいるか探しに出かけました。おじいさんはおじいさんで、日本人が来ていると聞くと、そこに橋本さんが交じっていないか探しにきました。あるとき橋本さんは昼食の席にそのおじいさんを連れてきたのです。何度か乾杯を繰り返した後で、私は橋本さんのカメラを借りて彼ら２人が肩を組んでいる写真を撮りました。橋本さんの家に行って見ると、彼はそれを大きく引き伸ばして額に入れて自分の部屋に掛けていました。

大同でボランティアツアーの人たちを案内しながら、私はよくこの話をしました。こういう事件があったけど、理解し合えるものだし、理解し合わないといけないんだと話したんです。それを橋本さんが聞き付けたんですね。私のところに来て「高見さん､俺のことを話しているらしいな」と言うのです。橋本さんは私と同じですごく口が悪いので、私もちょっと身構えました。すると彼は一言､「だけどいい話だよな」と静かに言いました。それで解禁されたんだと理解して、その後もこの話をしてきたのです。橋本さんも自分で写真集を発刊したとき、あとがきにこの経験を書いています。

その頃は全く知りませんでしたが、事件があったのは盧溝橋事件の２か月後のことで、日本軍が発動した察哈爾作戦とか山西作戦の最中のことでした。中国では天鎮惨案として有名な虐殺事件で、そのおじいさんは生き残りの１人だったんですね。

日本人として普通ならあまり来たくないところでこの事業をスタートしたんですけど、だんだんいい関係ができてきたのは一緒に汗を流したのがよかったと思います。最近は毎年 250 人くらい、この 16 年では延べ 2600 人ほどの人が大同に足を運んでおり、最年少者は１歳半、最高齢者は 84 歳です。農家にも１晩泊めていただいて、農村の生活を体験し、交流を深めてきました。

何年か前に私は共青団中央と中華全国青年連合会が主催したシンポジウムで報告したことがありますが、その題は「恋愛と結婚・子育て」というものでした。内容は日中友好というのは恋愛のようなもので、お互いの理解が浅いうちが燃え上がるものだ、自分の彼女はトイレなんか行かないし、おならなんて絶対にしないと思っている方が燃え上がるに決まっているわけです。それに対して木を植えて育てるのは、長い結婚生活を維持しながら子育てするようなもので、相手の欠点や弱点も理解してお互いに助け合うことが大事なんです。恋愛のときはお互いに気持ちのいい時だけ会ってお互いに向き合い、相手の顔を見つめ合っていればそれで幸せです。でも子供を育てるとなると、困難に遭遇したときほど身を寄せ合い肩を並べて助け合っていくことが大事です。そういう話をしました。

それから何年もたって、今振り返ってみてもそのとおりだと思います。私たちの場合、初期に失敗や困難にたくさん出会いましたが、そのことがお互いの理解と信頼関係を深めるのにむしろ役立ったと思います。あれがスラスラと成功から成功へときていたら、こんな関係には恐らくならなかったでしょう。

先ほどスライドで木が育ち始めた様子を見ていただきましたが、10 年、15 年をへて、初期のような苦労は確かに少なくなりました。では、それですべて順調かというと、決してそうではありません。大同のスタッフたちはこの間にものすごく経験を積んだと思います。飛躍的に能力を伸ばしました。私も少しは学習しまして、初期のような無謀な願望を抱かなくなりました。そこの状況に合わせて一歩ずつしか前進できないということです。余り欲張って無理な目標を立てても、できないことはできないのです。その辺りで呼吸が合ってきました。

ではそれで楽になったか、うまく行くようになったか、すべて安心かといえば、そうはいきません。事業の内容が複雑になり、高度になってきました。以前とは比較にならないくらいたくさんのことをやっています。これも子育てと同じですね。子供が小さいときは小さいなりの苦労があり、大きくなれば大きくなったで、以前とは違う苦労や心配事がでてくる。武春珍所長なんか、息子の方が背丈もずっと大きくなりましたけど、心配事は絶えないんです（笑）。

もう少し具体的に申しますと、私は何度も言いますように中国語も分からないので誤解していることもあるかも知れませんけど、中国社会も今大きな転換点に差しかかっているように思えてならないのです。欧米や日本などが 4 世代､5 世代かけてやってきたことを、今の中国は 1 世代のうちに凝縮してやっていますね。それで問題が顕在化しないはずがありません。その 1 つが環境問題の深刻化です。それについては水問題を中心に最初にお話ししましたので、これ以上は触れません。

もう 1 つは格差の拡大です。東部沿海地方と内陸部との地域間格差は巨大なものです。そして私が通っているのは山西省なのです。山西省のトップリーダーが「山西省不是東西」と言ったそうですね。「東西」というのは中国語で物のことですから、「山西省は物じゃないんだ」と言ったんですね。そこには「山西省は東でも西でもない」という意味も込められています。山西省は東部沿海地方の大発展から大きく取り残されました。それから西部大開発が戦略化されたとき、山西省は西部に入っていませんでした。税制その他の面で不利になったようです。現に山西省には外資はほとんど入っていません。

それから都市と農村の格差拡大も深刻です。大同は中国最大の石炭の街です。石炭は庶民の生活燃料ですから、その価格は政策的に低く抑えられてきました。1980 年代から 90 年代にかけて中国経済が離陸するなかで、建築用の砂利より石炭が安いということすらあったわけです。その一方で石油の役割が大きくなったり、内蒙古や陝西省で天然ガスの開発が始まると、石炭は過去のものになったんではないかという雰囲気も一時は広がりました。そのころの大同は暗かったんですね。

ところが近年の中国経済の大発展、大膨張のなかで石炭も不足するようになりました。掘っても掘っても足りません。その結果、先ほど話しましたように、たった 6 年間で石炭価格は 7.5 倍にもなりました。大同市の GDP の 60 パーセント以上を石炭関連が占めると言われますが、その基幹のところでそのような巨大な変化が起これば、一体どうなるでしょう。全く分からないというのが私の率直な気持ちです。まずは物価が急上昇しています。特に肉、野菜といった食料品が値上がりしています。豚肉はこの 1 年で 3 倍以上に上がりました。住宅も 2 年で 2 倍に上がっています。衣食住のすべてと言いたいところですが、衣類は横ばいのようです。自動車や家電製品はむしろ安くなっているそう。そういうバラツキもあります。

食料品が上がっているし、農業税も廃止されたから、農村は良くなっているんじゃないかと思われるかもしれませんが、そうではないですね。最初に申しましたように、今年は深刻な旱魃で収穫が望めません。取れたとしても自家消費分が精一杯です。平年だって売るだけの余剰はそうあるわけではありませんから、食糧の価格が上がっても大幅に収入が増えるわけではないのです。その一方で石油などの素材にかかわるものの価格上昇が急ですから、化学肥料は高くなる、農薬も高くなる、ガソリンは高くなる、農器具も高くなる。むしろ苦しくなる要素の方が大きいんじゃないですか。

石炭で大儲けをしている人の話とか、株で大儲けをしている人の話とか、それは彼らの耳にも入るでしょう。通信は便利になりましたからね。農村にいても、心は落ち着かないと思いますよ。「どうして自分たちだけが置き去りにされているんだ」とね。その焦りや苛立ちを、いろんな場面で私も感じるようになりました。農村がいつまでもおとなしいと思ったら間違うでしょう。

そんな中で、現地の活動を推進しているのは私たちのカウンターパートなんですね。彼女たち彼たちの活動ぶりを見ながら、ほんとに大変だなと思います。「以前は良いことはやり易かったけど、今は良いこともやりにくい」と言うんですよ。そう言いながらも、ほんとによくやっています。私は完全に脱帽で、マネのできることではありません。でも人間はこのような困難の中でこそ鍛えられ、能力を向上させるんでしょうね。この事業を継続しながら、この事業を支えてきた人たちが今後どのように成長し伸びていくのか。それを見ることは、ある意味では樹木が育つのを見るのより、もっと楽しいことですね。何か無責任な感じがしないでもありませんが、ほんとにそれは楽しみです。

とりとめのない話で恐縮ですけれども、私の話をこれで終わります。どうもありがとうございました。

（孫）　高見先生どうもありがとうございます。続きまして、北京大学環境学院副院長の劉先生にコメントをしていただきます。

（劉）　来賓の皆様、先生、それから学生の皆さん、こんにちは。高見先生のすばらしい講演に非常に感謝するとともに、孫先生にコメンテーターとしてお招きいただき光栄に存じます。私は生態系に関して研究しておりますので、今回のフォーラムのタイトル“黄土高原緑化協力の１５年”はすぐに、私の興味を引きました。なぜならば、私自身の研究はこの地域及びこのような地域の植生の変化や植生の回復などに関するものだからです。

私は主にこの分野で研究をしておりますので、実際に植生の回復に活動をしている専門家の方と交流するのは私にとって非常に望ましいことです。一方、現在、国際社会が中国の生態系の改善に関心を持っていることには、私自身感激すると同時に、プレッシャーも感じます。私達の生態系の現状は余りにもひどくて、また我々の研究は始まったばかりで、国際的な関心が集まるのは、我々の将来の仕事にとってプレッシャーでありますが、チャレンジであるとも言えます。

環境問題は地球的な問題であり、中国の環境問題は全世界と係わっていると思っております。モンゴルや大同から吹いて来た風砂（黄砂）は北京でも観察できるし、日本でも観察できるのでしょう。日中韓三カ国では２年ごとに風砂の問題に関する国際会議が行われています。私もよくそれに出席しておりました。この会議から､我々は地球の一員として、周りの環境に関心を持つ責任があることが感じられました。皆さんがご存知の通り、中国と日本は一衣帯水の関係でありながら、文化や経済の面では大分違い、自然条件は完全に異なります。日本は海洋性気候を持つ国ですから、日本人は中国のこのような過酷な自然を感じ難いでしょう。

大同市は季節風による気候の影響を受けている地域の外縁にありますので、この地域の降水量は非常に少なく、降水量の変動は非常に大きく、植生は森林と草原の間の生態系であるべきです。そして高見先生のご講演で分かったように、霊丘のようなある特定な条件では森林の成長が可能です。しかし、大同市の北部では森林が育ち難いのです。ですから、高見先生は１５年の努力を重ね、現地の人との交流の困難を乗り越えただけではなく、自然条件的な困難をも乗り越えました。このこと自体は本当に奇跡的だと思います。中国の生態系の破壊は気候の変化によるものであるのみならず、過剰な人類の活動も非常に大きな原因であると思っています。

先ほど高見先生は旱魃の問題を述べましたが、実際、現在の中国の北方は旱魃化される脅威に晒されています。中国の国家気象局の研究によると、中国の北方地域は最近の 20 年の間に旱魃化されている状態にあります。しかし、ただ気候の旱魃によるものだけでなく、人の活動による破壊が大同地域の植生の破壊に非常に大きな要因だと我々は考えています。歴史の文献研究から、北京の風砂はこの地域の開発に関わっていることが分かります。もし大同の開発がもっと盛んになれば、北京の風砂も強くなるでしょう。逆に､大同の開発が弱ければ、北京の風砂も弱くなります。このことはすでに文献資料により証明されました。我々が現在直面している問題は、ますます旱魃が進む気候変動とこの地域の莫大な人口です。これらはこの地域の植生の回復の大きな妨げになっています。

砂漠化防止活動には現地の人々の協力が欠かせないですから、高見先生の経験は我々にこの面で素晴らしいモデルを提供してくれました。我々はどうやって現地の人の協力を得て、砂漠化防止の目的を達せるかということも検討しています。これは簡単にいえば、我々の都市と環境学院は、生態系と環境学の理論を研究するだけではなく、生態環境を改善するための実際の活動を非常に重視しています。高見先生の報告を聞いて、植生の回復のためにこの分野での研究が重要性を増すと感じました。先ほど高見先生はどのような木種を選択すれば成功できるか、どのような技術、たとえば巻き根技術を使えば松をこの地域で育てることができるかなどを述べましたが、これは我々の研究分野でもあります。

我々も将来日本の大学や研究機構、NGO などと共同研究、協力ができればいいなと期待しております。そして、私たちの美しい明日のために、共に頑張りましょう。ご清聴、ありがとうございました。

質疑応答

（孫） それでは質疑応答の時間に入ります。皆さんの関心のあるところ、あるいは疑問に思っているところ、または是非この場を使って高見先生に聞きたいことなど何でもいいですので、是非手を挙げて質問してください。

（質問１） 私が高見先生に申し上げたいのは、私は南京から来たということです。歴史問題のために、南京は日本に対して特別の感情があります。しかし、ここで、先生にお伝えしたいのは、現在はそのような状況がだんだん変わっているということです。南京の人はもう既に日本による戦争の歴史を忘れようとしています。高見先生のような中国に協力して相互理解・信頼を進める日本の方はもっと多く中国へ来てほしいです。私は中国人がだんだん過去の歴史に対しての感情から解放されてゆくことを確信しています。既に今日まで長い歳月が過ぎましたので、以前の日本人、いわゆる中国に友好的でない日本人に対して、過去のことを一斉に忘れ、私たちの新しい未来を開拓しましょうと言いたいです。

（高見） 大同ではまだ過去になっていないという印象です。相当にひどいことが実際にあり、それを体験した人たちがいらっしゃいますから、そんなに簡単ではないし、存在していて当然だと私は思っています。その後の日本の変化も、被害に遭った農村まで届いていないこともあると思います。日本人に対しても、年配の人に対するのと先ほどスライドで見ていただいた若い学生たちに対するのとでは、農村の人たちの対応に違いを感じます。ですから労働力としては余り期待できないけれども、若い彼ら彼女らが大きな仕事をしたというのはそういうことです。一緒に働いて汗を流し、農家に泊まって遊んだり子供と仲良くしたりという中で、少しずつ変わっていったのではないか。それが大きなことだったんじゃないかと私は思っています。ありがとうございました。

（質問２） 私は北京大学日本語学科の 1 年生です。高見先生の報告を聞いて、非常に興味があることがあります。いただいた資料を読んで、貴協会がお金を出して、一面の土地の 50 年の使用権を購入し、保護区を建設して、植生態を回復したことを知りました。私が強く知りたいのは、貴協会はこのようなことをやるのにどれぐらいのお金がかかったのかということです。また、この活動を行うのには年間幾らの経費が必要ですか。もし大量の経費がかかるなら、このような活動は難しいです。皆さんご存知のとおり、この協会は日本人から出資、日本の財力によって成りたっています、しかし、現在の中国ではこのような協会、NGO はまだ少ないです。私はこの原因が経済条件によるのかどうかということを聞きたいです。

（高見） 現地のプロジェクトにかかる費用は年間 200 ～ 250 万元くらいだと思います。累計で 2500 万元にはなるでしょう。専門家の派遣費などは含めていません。私たちも決してお金があるからやっているのではありません。最初のころのことが面白いと思うのでお話しします。1992 年の 1 月にスタートしましたが、そのとき私たちには組織もなければお金もありませんでした。やっていこうという気持ちがあるだけで、専門の人もいなくて、ど素人ばかりでした。大同市渾源県で話し合いを持って「さあ行こう」ということになり、最初の 1 年間は 10 万元の予算でやろうと決めました。当時は

１元が 26 円でしたから日本円にして 260 万円なのですが、そのとき私たちの手元には一文もなかったのです。日本に帰ってから「こういう協力事業をスタートさせ、初年度 10 万元が必要なので募金に協力してください」といって寄付を集めました。両方をだましだましでスタートさせたのですから、無茶と言えば無茶だったと思います。途中でこけたらひどい詐欺師だったわけです。

今もその構造は変わっておりません。年間の予算を年度初めに立てるとき、手元にあるお金は基本的にゼロです。それまでの実績を基礎に計画を立て、あちこちに働きかけてお金を集めて、片目で集まってくる金額を見ながら、現地で「今年はここまでやろう」と決めていきます。ですからずっと綱渡りです。縄をないながら綱渡りしているようなものです。ですからお金があったからできた、豊かだからできたということでは決してないし、やろうと思えば誰でもできることだと思います（拍手）。

（質問３）　先ほど休憩中に展示されている本を拝見しました。高見さんは西北地域でたくさんのアンズを植えて、これによって大きな経済利益が得られたのは、非常に素晴らしいことです。大変感謝します。私たちがよく知っているように、大面積のアンズの栽培は生態の単一化をもたらし、災害を引き起こしやすくなります。しかし、先生方は専門家ですから、このようなことを予防する良い技術を持っているはずだと思っています。私の質問は、貴協会が、もしこのアンズから撤退したら、誰が引き継いでやるのかということを考えたことがありますかということです。また、この協力活動の中で、貴協会は当地の農民たちや、彼らの家族に対して、この方面に関しての技術教育を行いましたか。

（高見）　せっかくの質問なので最初に失敗した話をした方がいいですね。初期に取り組んだプロジェクトの中にみごとに失敗した例があります。大同県の徐町郷というところでやったアンズのプロジェクトです。1994 年春のことですが、80 ヘクタールに６万本を植えました。地元のリーダーがとても熱心で、それ以後を含めてもあそこまで丁寧に植えたことはないぐらい丁寧に植えました。翌年に行ってみると生育のいいものには花が咲き出しており、そのリーダーが私に「来年は少し実をならしてみたいけれどもいいだろうか」と言うのです。「小さな苗に実をたくさんならせると苗がやせて良くないけれども、少しだけならせてみたい。というのは、ここの農民はアンズを栽培した経験がないのに、政府の指示で植えている。本当に成功するかどうか確信がないのです。少しでも実がなるのを見れば、あ、これはいけると確信を持つことができます」と言いました。私は「それはいいことだ」と即座に賛成しました。

ところがその翌年の 1996 年夏に行ってみて、車窓の光景に驚きました。あのアンズがどこにもないのです。郷政府に行って幹部に会うと、党書記が「アンズは大変うまくいっているので来年はもっと拡大したい」と言います。私はもう一度びっくりしました。本当でしょうか。党書記は「去年は自然災害がひどかったから枯れるものも出てきたけど、70 パーセントは元気でいる」と言います。付き合いの長いナンバー２の郷長に「あんたはどう思う？」と聞くと、「70 パーセントには足りないかもしれないけど、60 パーセントは確実だ」と言うのです。私は椅子を蹴って立ち上がって「こんなばかな話をしてもしょうがないから、もう帰る」と言いました。そうすると私の通訳の王萍がにこにこ笑いながらそれを通訳したのです。後で私が「王萍！おまえの通訳は通訳になってない」と言うと、彼女は「いいえ、高見さんの言ったことを忠実に通訳しました」と言うんです。「なに言ってんだ！言葉はそうかもしれないけど、俺があんなに怒ってるのに、あんたは笑いながら通訳しやがって、そんなことでこっちの気持ちが伝わるか」と言ったのです。そしたら「怒った高見さんの顔を初めて見て、それがおかしくて…」と言ってまた笑います。「しょうがないな、王萍の通訳ではとてもケンカはできないな」と思いました。

椅子を蹴って立ち上がったのはいいんですけど、落しどころを私は考えていませんでした。向こうも困ったんですね。「あなたがそこまで言うのだったら、現場に行ってみよう」と言ったんですよ。で、一緒に現場に行きました。こっちだって残っていてほしいから、一番良さそうな所に行ったんです。でも 10 パーセントも残っていませんでした。立っているのが辛かったくらいです。

原因はなんでしょう。先ずは野ウサギの食害です。なにもかも枯れて草の芽もまだ出てこないという春先が一番深刻です。ほかにエサがないのでアンズの皮をかじります。形成層が甘いんですね。でもここをぐるっとかじられると樹木は枯れてしまいます。ウサギの害で弱っているところに今度はアブラムシが発生しました。直接の原因はウサギとアブラムシですけど、ほかにもいろいろ問題がありました。

痛かったのは郷の党書記に異動があったことです。熱心だった人がほかに行って、新しい人が来た。前の年はちゃんと野ウサギへの対策をしていたんですけど、新しく来た人への引き継ぎが十分でなくて、手を抜いたところをやられてしまった。小面積だったら打つ手もあったでしょうけど、いきなり大面積に植えたから完全に受け身に陥りました。それから農民の中に不満や不安があったのです。アンズを植えるとそれだけ畑が減り、それまでの作物の収穫は減ります。しかもアンズの収穫があるのは数年後です。その期間を耐えないといけません。もう 1 つ深刻な問題が偽苗です。アンズなど果樹の苗木は接ぎ木が必要です。ところが接ぎ木は失敗することがあるんですね。接いだ芽が枯れてしまって、台木から出た芽が伸びる。春に植えるときは葉がないから、経験のない農民や私たちには区別がつかなかったんです。葉が出てからそのことが分かって「これじゃあ実がなっても収入にはならない」ということで、ほかの村では引っこ抜かれるケースも出てきました。この村でも恐らくそういうことがあったと思います。

そんなことでみごとに失敗したんですけど、でも、あの失敗があったから今まで続けることができたのではないか。負け惜しみでなく、私はそう考えています。なぜかというと、例えばこの偽苗の問題があったから、苗はとても大事だから自分たちで責任を持って育てる必要があると考えて、環境林センターという拠点を早い段階で建設することになりました。それから、どんなプロジェクトも地元の管理能力を超えたものは必ず失敗します。ですから最初は小さく作ります。いろいろな問題が起きますので、それを克服する過程で経験を積むことができます。経験を積み自信をつけてから徐々に拡大していきます。そういうやり方もこれらの失敗の中で学んだことです。

だんだん質問の内容に沿っていこうと思います。先ほどアンズの満開の様子をスライドで見ていただきましたが、あのプロジェクトも偽苗の問題が深刻でした。せっかく活着し育っているのに村の人たちが大事にしないのです。私が見ているところでもウシがはいって苗をかじったりします。「ちゃんと管理してくれ」と何度言っても生返事でやってくれない。ある時などは私が石を拾ってウシを追って走ったことさえあります。しかしその時は原因が分からなかったのです。あとで分かったことは、育った苗に偽苗が多かったのです。そんなところに武春珍さんが大同事務所にやってきて、現場で接ぎ木をやり直すことを手配してくれました。大きくなった苗木に優良品種の枝を接いでくれたのです。まもなく収入になるようになりました。収入になるようになれば、果樹の場合、もう心配は要りません。

去年の春そこに行ってみると、また接ぎ木をやり直しています。もっとお金になる新品種が出てきたので、その枝をもらってきて自分たちで接ぎ木をやり直したのです。ほかにも土杏と呼びますけど、落ちた種から自然に生えたアンズの木を途中で伐って、新しい枝を出させ、それに接ぎ木をするといったことを次々にやっています。果樹の場合は最初の収穫まで持ちこたえることが大変ですが、お金になり始めると後は心配要りません。地元の人たち

が懸命に管理してくれるようになるというのがこれまでの経験です。最初のころ私は「環境が大事だ」といって観念的な話ばかりしていたんですけど､最近は「こっちの方が儲かるよ」なんてことで、話す内容も変わってきました。ちゃんと回答になったでしょうか？

（孫）　アンズ以外に何かほかにお金になるようなもの、大同にとってメリットのあるものはないのでしょうか。

（高見）　まだどうなるか分からないのですけれども、大同の辺りではマツをたくさん植えているのです。マツの木から採れるロージン＝松脂は現代の生活に欠かせなくて、需要が急激に伸びています。例えば再生紙の強度を高めるために不可欠ですし、印刷インクのにじみ止めにも必要です。食べ物としてはチューイングガムに入っていますし、プラスチック製品にも使われています。それからＩＴ、電子機器のハンダ付けなどに松脂が欠かせませんので、需要はこれからも増えます。松脂を採取するためには人手が必要ですから、農村に雇用を作り出すことになります。いずれにしろマツがもう少し大きくなってからの話ですけれども、可能性はあると思います。そのためにはマツを健康に育てなければいけないので、ある程度の大きさになったら間伐しなければいけないとか、いろいろな問題が出てきます。いま植えているマツが経済的にも役立つのでなければ、先行きの展望が出てきませんので、これから研究していく必要があると思っています。

（質問４）　私は中国人として貴方に深く感謝します。貴方は遠くから中国に来て、貧乏な農村―黄土高原に来て、私たちが改善すべき環境のために、自らの努力によって貢献してきました。特に、貴方は１５年間ずっと農村で過ごしました。これは中国人でも難しいことです。まず個人として、それから中国人の代表として貴方に深く感謝します。１つすごく知りたいことがあります。高見さんはどうしてそんなに心をかけて、１５年間もの長い歳月を続けて、中国のために仕事し、貢献してきたのですか。特に貴方は日本人として、完全に異なる文化を持ち、かつ歴史問題がある国に来て、非常に困難だったと窺うことができます。一体何が貴方を今のような大きな成功に至るまで、かりたたせたのですか。

（高見）　正直な気持ちを話します。1992 年１月に渾源県に行ったときは５人でした。その後、賢い順番に１人ずついなくなり、ばかで逃げ足の遅いのだけが取り残されました。最初からうまくいかなかったのです。それには歴史問題があります。それから山西省は改革開放がずっと後れてスタートしたところで、外国人と付き合った経験も少なく、私たち日本人にとっては訳の分からないことが多過ぎました。「こんな所ではとてもやっていけない。続けられるものじゃない」となるわけです。

具体的に申しますと、たとえば行政区画の変更がありました。1993 年より前は大同の周辺の農村部は雁北地区と呼ばれていました。雁門関の北の意味です。そのうちの幾つかの県が都市部を中心とした大同市に合併されて大きな大同市になりました。その後、人事異動がすごかったんですね。半年ほどおいて行ってみると担当者が全員交替し、引き継ぎもなされていません。こんなことでは成果は望めないというので、見通しのきく賢い人ほど先にやめていきました。私は逃げ後れて、最後に残されてしまったのです。

こういう事業は始めるのは至って簡単です。何人か集まって「さあ始めよう」と言えばそれで始めることができます。さっき話しましたように両方をだましだましです。この会場にも内蒙古自治区の阿拉善（アラシャン）で緑化に取り組んでいる人がきていますが、正直なところ緑化ほど割の悪い仕事はないのです。どういうことかと言いますと、悪い結果はすぐ出ます。春に植えて夏に行ってみると全部枯れているということが起こるわけです。逆に良い結果が出るまでには長い時間がかかります。大体において日本人はせっかちですし、制度的にも３年５

年の区切りでやられることが多いんですね、助成金なんかも。ところが緑化はそんな期間で成果がでるはずがありません。15 年、20 年と時間をかけるなかで、成果も問題点も見えてくるものです。スタートの時は勢いで行けるのでまだいいのですが、2 年目、3 年目、4 年目とだんだん辛くなります。成果として打ち出せるものはないし、お金は集まらなくなるし、人もいなくなる。その上、私たちの場合、失敗が多かったでしょ。ですから始めるのは簡単ですけど継続するのは難しいのです。

継続するのは困難ですけど、もっと難しいことがあります。それはやめることです。やめるためにはものすごいエネルギーが必要なんです。緑の地球ネットワークの会員は現在 650 人ほどですけど、その人たちは何の見返りも求めず善意だけで参加して下さった方たちです。自発的な善意で自分の気持ちやお金を預けて下さっている。やめるためにはその人たちに納得していただく必要があります。それを説明して回る苦労、必要なエネルギーを考えると、「大変だけど続ける方がまだいいや」と思うのです。正直な気持ちを申し上げました。

（質問５） 私の母親は大同で生まれ、大学卒業までそこで生活していました。大学を卒業した後、大同を離れ南京に行きました。そして、彼女は大同の環境が非常に悪いことに気付き、南で生活することが好きになりました。しかも、母親の友達や同窓生たちも同じ考え方を持ち大同を離れ、もっと豊かな都市に移りました。私が高見先生に伺いたいことは、高見先生は自ら努力によって、こんな考え方を持つ人々に彼らの考え方を変えることができると思いますか。あるいは、貴方の努力によって、もっと多くの資金と人材を引いて今の事業に取り込むことができますか。

（高見） 私は地元のためだけを考えてやっているのではないのです。これも正直な気持ちを申しますと、私はいろいろなことを知りたいのです。例えば中国は日本にとっても大事な国ですが、それがどのように変わっていくのか知りたいのです。この国がどういう形をしているのか知りたいし、いろんなことに興味、関心があります。知りたいという欲望が一番強いのです。

ところで中国を 1 つの山に例えると北京は頂上です。山の頂上から見たのではその山の形は見えません。北京にいたのでは中国のことは分かりませんし北京のことも分かりません。山の形は山のふもとに下り、それから少し離れた所に行くと見えるんですね。私たち日本人は富士山をきれいだと思います。中国の人たちにとっても日本のシンボルは富士山のようです。私が大同で一緒に仕事をしていた祁学峰という男が経団連の招きで日本に来て、「富士山を見たい」というので富士山の五合目まで連れて行きました。そしたら彼は「なんだ、金山寺と変わらないじゃないか」と言いました。金山寺というのは大同火山群の 1 つで、溶岩でできた山です。富士山も五合目あたりは溶岩がごろごろしていてきれいじゃありません。富士五湖あたりまで離れて、富士山が水面に映っている辺りで見ると本当にきれいですね。ですから皆さん、勉強しようと思ったら、この北京だけにいたら北京のことも分からないんです。大同あたりまで行って私たちの活動に参加してもらうともう少しいろんなことが分かってくると思います。

私の日本での経験でもこういうことが言えます。その社会の抱えている根本的な矛盾は先ずは辺境、境目のところで顕在化するんです。日本で公害問題が多発したとき、その深刻さを最初に分からせてくれたのは、水俣病とかイタイイタイ病でした。どちらも本当に貧しいところで、しかも境目ですね。水俣病の被害者の多くが貧しい漁民でした。そして水俣は熊本県にあるんですけど、被害が深刻だったのは鹿児島県との県境に近いところです。公害は工業化に伴うものですから、一番都市化したところで発生しそうなものですが、そうじゃないんです。私が中国の水問題に関心を持つようになった契機は広霊県の苑西庄村です。小さな村でお金もないし、誰も行きたがらないような村です。そこで井戸

を掘るのに協力したことから中国の水問題の深刻さを知るようになりました。ですから皆さんも中国の現実の姿、これからどう変化するかを知りたかったら、大同あたりの農村に行けばいいのです。いろんなことが分かると思います。

（質問６）　私は日本が今後の数年間で中国への援助を中止するという話を聞きました。中国はもう既に発展中の国ではないからという理由だそうです。こんな状況でも、高見先生は日本人として、中国へ援助事業を継続しますか。それから、高見先生はどのような思いあるいは目的でこのような素晴らしい事業をやり始めたのかということもお尋ねしたいと思います。

（高見）　確か今から５年前、日中国交正常化 30 周年とＪＩＣＡ中国事務所の設立 20 年を記念して人民大会堂でシンポジウムがあり、私も壇上に上げていただいたことがあります。日本が対中ＯＤＡをスタートさせる目的として、中国を市場経済に誘導するということが日本国内では語られました。大同に滞在していますと私の携帯メールに小話がたくさん入ってきます。なかに「幹部が商品化している。官職が売買されている。」なんてものがあって、市場経済もちょっと行き過ぎたかと思うくらいです。

いまの発展には弊害もあります。環境問題とか格差の拡大とかがそれですね。言われるように日本のＯＤＡが大きな成果を上げたのであれば、その負の面にもいくらか責任があるはずです。今後はその弊害を克服するために、少なくとも幾つかのモデル的なプロジェクトを作って、そこで成果を上げて、「これで万歳です」というふうにやるべきじゃないか。そういう話をさせていただきました。これまでは大型のインフラ整備、飛行場を造る、港を造る、鉄道を敷くということをやってきて１つの面では成果を上げたけど、その反面でいろんな問題が発生している。その段階で「これでおさらばです」というのは良くないと私は思います。環境修復とか格差の是正とかそういうことをやらないといけないんじゃないか。私はずっとそのように考えていますが、でも私の声なんてどこにも届きません。

そういえば原稿には書いているのに、先ほどは話し忘れたんですけど、スライドで成果を見ていただいた霊丘の自然植物園で今年から３年間、ＪＩＣＡの草の根技術協力のプロジェクトをスタートさせました。大変ありがたいことです。けれどもあのプロジェクトの意義や成果が本当に見えてくるのは恐らく 30 年後、50 年後です。それくらいたつと本当に良いプロジェクトになると思います。けれどもそれは私たちのような弱小ＮＧＯには荷が重過ぎるんですね。このことの意義を認めてくれる中国側の団体と一緒にやりたいのです。ぜひよろしくお願いいたします。そのことを付け加えます。

（孫）　先生のお話でＪＩＣＡのお話が出たのですが、ＪＩＣＡの方で何かご感想とかコメントなり、いかがでしょうか。

（周妍）　皆さん、こんにちは。私は日本国際協力機構（ＪＩＣＡ）の駐中国事務所で勤めており、相互理解分野を担当しております。相互理解というのは抽象的なものですので、一体何をやっているのか聞いても分からない人がいると思います。私の仕事は具体的に言うと、毎年、中国から、各分野の研修生を日本へ大量に派遣しています。それから日本への留学生の派遣、政府機関で勤めている若い行政官僚らの日本への研修派遣などを担当しています。また、もう１つの重要な仕事―民間友好技術協力、日本語でいう“草の根技術交流”も担当しております。これについて、私たちは中国で既に 130 件のプロジェクトを立ち上げました。プロジェクトの規模は小さいですが、民間で幅広く実施されています。これらのプロジェクトの１つとして、非常に光栄にも、高見先生の大同での緑化事業を支援しています。

突然の司会者からの依頼にお答えして、私の事務所を紹介します。ＪＩＣＡの中国事務所には 60 人ぐらいの事務員がいます。国際機構ですから、そ

の中の 20 人ぐらいは日本人、40 人ぐらいは中国人です。我々が中国で行っている仕事の中にはたくさんの重要な分野があります。ただし、この重要な分野は中国の改革時代の変化に応じて調整をしながら決められています。現段階の重要な分野は第 1 に、伝染病の予防と環境の保護です。これらの問題は 1 つの国で解決できることではなく、ほかの国と連携しなければ解決できない問題であり、全人類の共通の問題であります。我々は連携して環境保護や伝染病などの問題を共同で解決していく必要があります。第 2 に中国の改革解放を支援することです。1978 年に中国で改革開放が始まり、その翌年 1979 年に、我々ＪＩＣＡの中国での仕事がスタートしました。したがって、我々の事業は中国の改革開放の進展と平行して行われています。

第 3 に日中両国の相互理解を促進することです。このことに関して、今は我々の仕事の重要な分野として、各分野でいろんなプロジェクトを展開しています。先ほど学生さんからＯＤＡが中止されても、高見さんのプロジェクトを継続するかどうかという質問がありましたが、ここにはちょっと誤解があります。ＯＤＡの減少は中国経済の発展、改革開放につれてだんだんに行われるということです。これは自然な流れであり、誤解しないようにして下さい。2008 年から、円借款によるプロジェクトの新規は停止されます。これは日中両国政府が共同で達成した合意です。円借款はＯＤＡの一種であり、名前から釈明すると、借りたお金を返さなければいけない、長期的なプロジェクトです。したがって、我々はこれから 10 年、15 年の間もプロジェクトの管理を行う必要があります。

円借款は停止するが、無償資金援助はまだあります。これもＯＤＡの一種類で、主にインフラ施設の建設に援助として投資されています。例としては日中友好病院や日中環境保護センターなどが無償資金協力により建設されたのです。しかし、現在は中国自身でも建設できるので、インフラ建設への投資はだんだん減少することになっています。現在はかつてのインフラ建設への投資を環境保護のプロジェクトに移しています。たくさんの無償資金協力による環境保護プロジェクトを立ち上げました。それから、人材の育成、例えば一部の留学生の日本留学は無償資金協力により実現したのです。また、ＪＩＣＡが支援している技術協力プロジェクトは全部無償資金によるものです、返還する義務がありません。だだし､これは直接に資金を渡すのではなく、日本から中国へ専門家を派遣、中国から日本へ研修員を派遣することに対する支援です。ちなみに、もっとも重要な存在として「人物」を通した相互交流が進展しています。この流れの中で、我々は日中間の相互理解、相互信頼を促進することができます。私は日本政府の代表ではありませんが、1 人の事務員として、このような交流が何らかの形でずっと続けられると確信します。以上、質疑に答えたかどうか分からないですが、参考になれば幸いです。

（孫） 高見さんの今やっておられることは草の根活動による民間交流です。ちなみにＪＩＣＡを知らなかった人も多いと思います。日本語を学ぶ学生はこのＪＩＣＡの活動に注目することも 1 つの勉強の内容に入れておいた方がいいかと思います。日本国際協力機構、Japan International Cooperation Agency でＪＩＣＡとなります。

（質問 7） 日本の会社の北京事務所に勤めています。私は仕事上、中国の水環境についていろいろと考える立場なのですが、今回の発表で非常に参考になることが多くありました。大同での高見先生の活動は、今、成功の花が開き始めたところだと思うのですが、これから大同の人々が本当に豊かになって環境を自分自身で直していくところに至るには、さらに多くの努力や多くの協力が必要だと思うのです。高見先生が続けてきたこの活動の次にどういう活動をしたいと思われているか、どういう活動を大同としてやるべきであるか、そういう展望があれば教えていただきたいし、その中で日本の企業、或いは中国の企業や人々が何をすれば良い循環をどんどん増やしていく助けになるか、その辺の意見

をもしよろしければお伺いしたいと思います。

（高見）　この事業は「20 年は続けます」と言ってスタートしたのです。私が言ったのではなく、顧問の石原忠一さんが協力団の団長としてどこに行っても「20 年は継続します」と言われました。私はその横で身を縮めて「明日潰れてもおかしくないのに 20 年なんて……」と考えていました。でもそれで始まったから仕方なく私も「20 年､20 年」と言ってきました。随分先のことだと思っていたのに、まもなく満 16 年ですから残りは 4 年です。最近はよく「その後はどうするんですか？」と聞かれるので、私はもう逃げたいんですけど､「逃げたい」とか「やめたい」とか余り言うと、死に体になって 20 年まで行けなくなりそうです。なかには「もう少し続けなければいけない」という人もいます。しかし、若い人たちの頑張りもあるし、若い人たちに希望を託すのが一番いいかなと思うのです。私個人としては 20 年もやればやり過ぎたくらいですから、側面からの援助の側に回って若い人たちを盛り立て、活動としてはより充実していくというのが望ましいと思います。

大同での事業は一応のパーツは揃ったと思います。たとえば霊丘自然植物園では人の圧力を除けば植生がどう変わっていくか、貴重な実例ができつつあります。しかし大同でも北部では事情が大きく異なります。先ほど劉先生がお話しになりましたけど、大同市の中央部にある恒山山脈の南と北とでは条件が大きく違うのです。ですから北部には実験林場「カササギの森」を造って、ここでもいろんなことをやっています。それから苗畑が 2 つあります。また日本だけで資金を造るのはこれからしんどくなるので、実験果樹園をこの春から建設中です。ある程度の資金をここで確保できるようになれば、ほかのプロジェクトを支えることができます。今アンズ 7 種類、スモモ 2 種類、ブドウ 7 種類を植えていますけど、地元に合ったものが見つかれば周囲の農村にも普及して行きたいと思います。

いくつかの拠点の中でそういうことをやり、一通り全体をカバーできるようになりました。部品は一通り揃ってきたわけです。それがだんだん充実し機能し始め、有機的に回転するようになれば面白くなると思います。その上にスタッフが力を付けてきていますので、本当に良くなるのはこれからですね。しかし楽しみを最後まで見てしまうのは贅沢過ぎるので、私としては途中のどこかで下ろしてもらうのが一番の願望ですね。

（孫）　今日のフォーラムのテーマは 15 年間を振り返る趣旨ですけれども、最後のご回答の中でＧＥＮの今後の将来も展望してくださったかと思います。長時間にわたって通訳してくれた同時通訳の方にも熱い拍手を送ってください。本当に皆さんお足元の悪い中お集まりいただき、休憩もしないで長時間のご協力をありがとうございました。ＳＧＲＡチャイナ・フォーラムはこれからも続けようと思います。ぜひ皆さんまた来てください。今日は本当にどうもありがとうございました（拍手）

あとがき

■ 今西　淳子

中国における第２回ＳＧＲＡフォーラムは、２００７年９月１４日（金）に北京大学生命科学学院報告庁にて、９月１７日（月）に新疆大学図書館二楼報告庁にて開催されました。昨年１０月、「若者の未来と日本語」というフォーラムを、中国で初めて、北京大学の同じ会場で開催しましたが、今回からは、ＮＰＯやＮＧＯ等の市民活動を紹介するフォーラムを中国で開催することにしました。今年は、まず、中国で緑化協力の活動をしている日本のＮＰＯ法人「緑の地球ネットワーク」事務局長の高見邦雄さんに講演をお願いしました。朝日新聞で見つけた高見さんの文章がとても面白かったので、是非お話を伺いたいと思ったのがきっかけですが、その後、ＳＧＲＡ会員の中村まり子さんにご紹介いただき、このように北京とウルムチで実現できたのは、大変嬉しく思います。また、日本語学習者ではない中国の学生さんたちにも聞いていただくために、北京大学日本言語文化学部を通じて最高水準の同時通訳をお願いしました。

緑の地球ネットワーク（ＧＥＮ）は 1992 年以来、山西省大同市の農村で緑化協力を継続しています。大同市は北京の西 300km ほどのところにあり、北京の水源、風砂の吹き出し口でもあります。そこでは深刻な沙漠化と水危機が進行しています。高見さんはパワーポイントで写真をたくさん見せながら（１）沙漠化防止のための植林、（２）小学校での果樹園作り、（３）自然林の保護という大同で展開する事業を紹介してくださいました。また、非常に厳しい自然条件の上、歴史問題をかかえた大同で活動することの難しさを話してくださいました。初期は失敗つづきでしたが、その後、日本側の専門家や中国のベテラン技術者の参加をえて、だんだんと軌道に乗ってきたということです。また、日本側も中国側も失敗と苦労を通じ、お互いを理解し、信頼しあうようになり、いまでは「国際協力の貴重な成功例」とまで評価されるようになっています。高見さんのお話は、参加者を引き込み「３時間があっという間にたってしまった」というコメントをいただいたほどでした。

その他にも、「黄土高原の厳しさを再認識、日本を再認識できた」「民間協力の実態を知った。一般の日本人の友好的な心が分かった。緑化に関する国際協力の大切さを知った」「高原の水不足の実態を知った。水を節約しなかったことを恥ずかしく思う。今までそのような土地があることすら知らなかった。今後何かしてあげたい」「環境問題はどんどん深刻化している。フォーラムを通じてハイレベルの教育者たちが努力されていることを知り、希望が見えた」などの感想が寄せられており、参加した北京大学と新疆大学の学生さんに対して、大きなインパクトを与えたと思います。

北京では、珍しい大雨にもかかわらず、協賛をいただきました国際交流基金北京事務所の小島寛之副所長はじめ、中国で植林活動をされているＪＩＣＡのみなさん、ＧＥＮ大同事務所所長、渥美財団理事長、そして北京大学の学生さん等、１００名を越える参加者が集まりました。また、ウルムチでは、新疆大学化学学院長をはじめ、教員の皆さん、そして大勢の学生さんが集まり、３００用意した同時通訳用のヘッドセットが足りなくなりました。ふたつのフォーラムを実現してくださったお二人のＳＧＲＡ会員、北京大学の孫建軍さんと、新疆大学のアブリズさんに感謝いたします。

■ 孫　建軍

「土地の行政を超えた協力はあり得ない」と講師の高見さんは言いました。せっかくはるばる外国から協力に来たのに、現地の人々の心だけでなく、行政の「心」も捕まえなければならないという心労は並大抵のものではなかったでしょう。村民と寝食をともにし、心と心のふれ合いができても、いわゆる政府の幹部の妨害に会っては、堪らないものです。初期の失敗はこのような「無理解」から来たものが多かったかもしれません。行政との付き合いは、中国人ですら難しいのに、外国人の高見さんの努力に頭が下がります。

「賢い順に消えていく」日本のパートナー。事の始まりは簡単なものだったようですが、持続の難しさを語る高見さんは、実は持続の大切さを教えてくださいました。事を成功させるには、困難に向かって、一歩一歩、続けなければなりません。言葉の勉強はさることながら、人生そのものに生かしたいものです。北京会場には、多くの日本語学科の学生が来ていました。日本語そのもの、或いは小説、ドラマ、アニメ、ゲームのような日本文化にしか触れていない学生にとって、高見さんの講演、高見さんの行動は異様なものだったかもしれません。日ごろほとんど接する機会がないからです。でも、質疑応答の時に出た質問から見れば、彼らの心に相当な衝撃を与えたように思えます。「大同から脱出した人をどうすれば大同に呼び戻せるのか」という質問は、実は自分に言い聞かしているように思えました。少し離れたところから見ることによって、改めて自己を認識できるという意識の芽生えにつながるといいと思います。

■ アブリズ

今回のフォーラムを通して感じたことは多いですが、それを読み易い文章にすることは理科系の研究ばかりやっている私にとって難し過ぎます。３日間同行させて頂き、講師の高見さんは、植物を研究する大学教授のように思えました。緑化は自然環境を取り戻すための唯一の手段です。高見さんが 15 年間続けて来た緑化運動の貴重な経験は元々乾燥地域で、砂漠化がだんだん酷くなっている新疆ウイグル自治区に取っても宝ものであると強く感じました。

フォーラムが開催されるまでは、会場がいっぱいになるか、最後までどのぐらい人が残るかなど色々心配していました。今日、院生から受け取った参加者名簿を見てびっくりしました。なんと３９１名のサイン！そのなかには新疆大学化学学院、資源環境学院、人文学院、新聞学院、生命学院、物理学院などの教官と学生、日本人留学生、新疆教育学院で研修している高校の先生などがいました。この講演を通して、若い学生が中日両国の民間人の相互理解、国際交流と国際協力に深い関心を持っていることが分かりました。

高見さんの講演は、新疆大学の学生にとって、非常に強い印象を与えたと感じました。フォーラムの後で学生や教官たちが講演内容も通訳も素晴らしかったと私に語ってくれました。今回のフォーラムは新疆大学の歴史では初めて同時通訳で行われたフォーラムとなりました。またＳＧＲＡフォーラムでも参加者が一番多いフォーラムになりました。またこの交流活動を続けていくことを願っています（疲れますが）。

アンケート結果

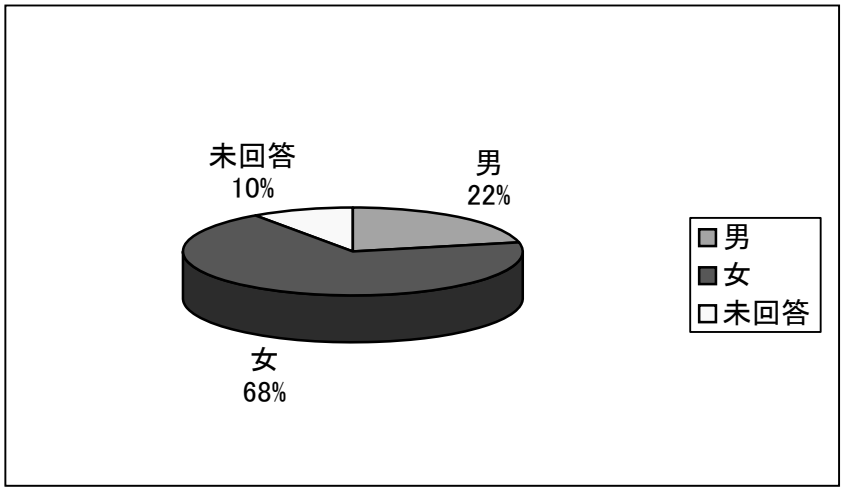
第２回ＳＧＲＡチャイナ・フォーラム

「黄土高原緑化協力の１５年」に参加して

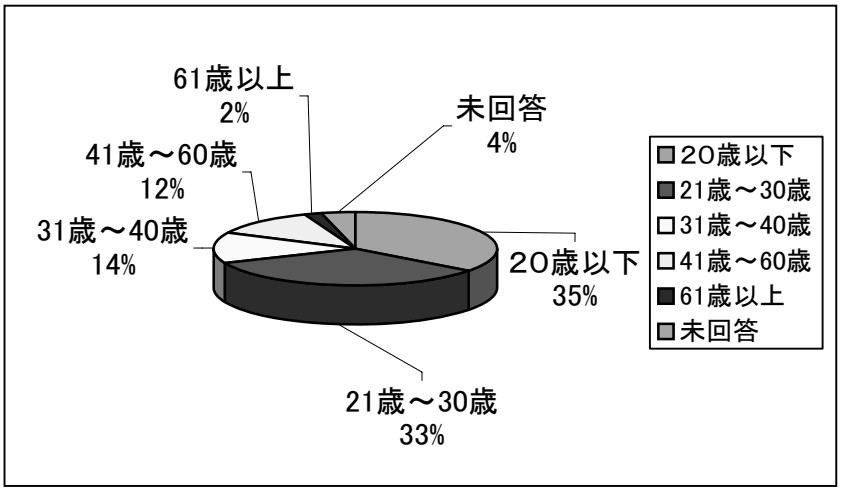
■北京大学

0. 回答者について

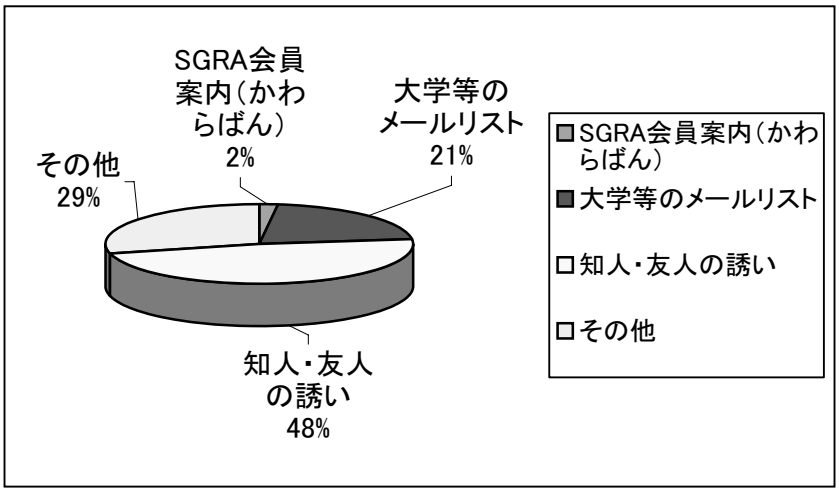
性別



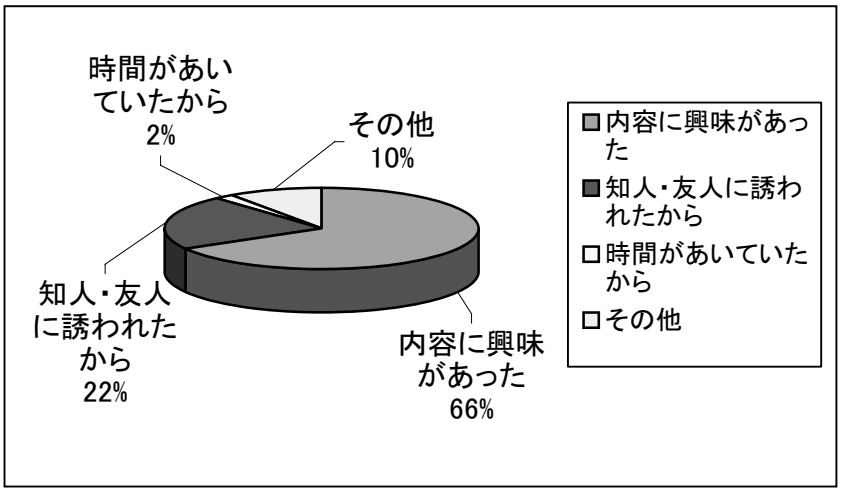
年齢



1.　今回のフォーラムを何でお知りになりましたか。



２．あなたは、何故このフォーラムに参加しましたか。



（その他）

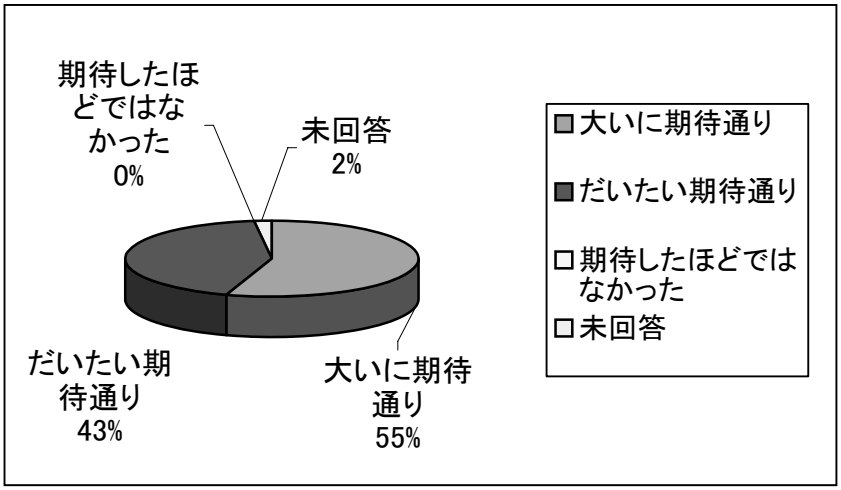
・同じ植林活動をしているから

・先生の要請

・講演会の様子を知りたかった

・7 年前に大同に行ったことがあったので

３．このフォーラムは期待通りでしたか？



（理由、コメント）

【大いに期待通り】

・図や数字などを通して、実情を紹介してくれた。
・多くの疑問について言及された。
・環境に興味があり、緑化について、くわしくわかった。中国での苦労された話がわかり、有意義でした。感謝します。
・高見さんのＧＥＮの活動の成果は大きい。
・実践に基づく話だった。
・非常にすばらしい、非常に感心。環境問題の解決に自分の力を貸したい。
・大同のことをたくさん知った。ＮＰＯの活動の実態や考えなどを知った。
・環境保護活動の実行可能性を知った。
・専攻の関係で環境問題に関心はなかったが、講演を通じて中国に存在する問題をたくさん知った。
・中日交流活動をたくさん知った。
・日本人の目から、大同の実態から、中国の環境問題のきびしさを知った。
・分かりやすかった。具体例があって衝撃的だった。
・黄土高原のきびしさを再認識。日本を再認識。
・ボーダレスな環境保護、日本の友人に感謝。自分たちにも保護に協力する責任がある。

【だいたい期待通り】

・高見さんのお話は以前にも伺っているので。
・３時間が長く感じませんでした。
・ＳＧＲＡのことをすこし知った。高見さんの協力活動を知った。
・ＳＧＲＡのことをすこし知った。海外ＮＰＯの中国での活動をすこし知った。
・ＳＧＲＡのことを知った。ＳＧＲＡの活動に賛同。環境問題に対する認識を改めた。
・緑化協力に対して、感謝する。

・民間団体も実績が残せることが分かった。高見さんのような邪念のない方が中国の緑化、地球の緑化に貢献している。感動させられた。この感動をもって行動に移したい。
・責任を感じた。
・民間協力の実態を知った。一般の日本人の友好的な心が分かった。緑化に関する国際協力の大切さを知った。
・日本の友人のおかげで黄土高原の人々の生活状況が改善された。

４．ＳＧＲＡでは、今後も中国の大学で、民間の公益活動を紹介するフォーラムを開催していきたいと思っています。あなたは、今後どんなテーマの話を聞きたいと思いますか？

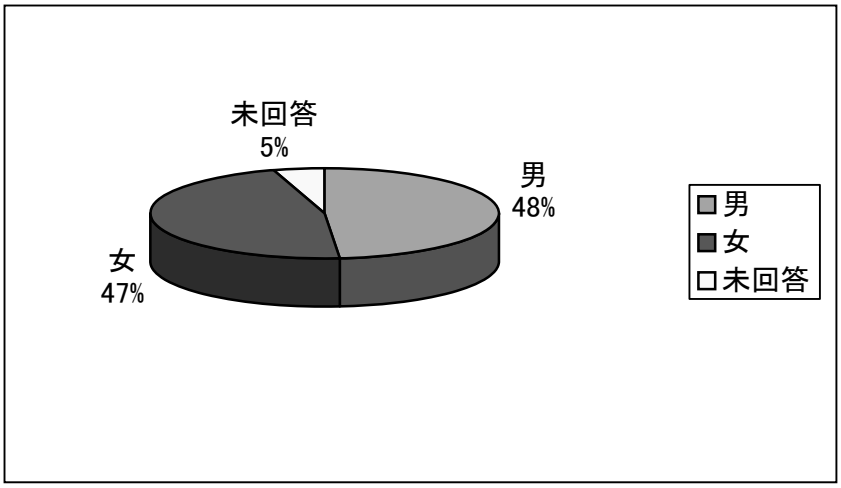
・中日民間公益活動の交流状況とプロセス。大学生としてできること。
・世界の平和、若者の将来
・日中相互理解のための活動
・中国と日本の関係、国際問題、社会、環境、ＩＴ技術
・ベンチャーの起業
・環境保護、伝統文化の保存
・日本留学、奨学金申請、資格
・日本人大学生の中国理解
・土壌の多様性、有機農業、葡萄りんご園
・中日文化の相違、発想の違い
・環境汚染対策
・日中大学交流、日本文化
・人口の素質、教育と環境問題
・教育関係への支援
・環境問題とボーダレスな協力について
・中日文化交流、児童の教育支援、資源の合理的使用、留学
・中日関係、国際情勢、科学技術の成果
・子供の健康、貧困児童の支援
・中日文化のかかわりと相違
・日本文化、科学技術、環境保護における日本の経験（方法、制度）
・中国の教育に対する日本の民間人の注目度
・水汚染防止のための活動、グローバルな貧困撲滅活動について
・文化交流、相互理解
・水汚濁の治理
・日中両国のボランティア活動について
・留学生への援助、人材の育成
・日本ボランティア活動、ＮＰＯ活動
・中国におけるＮＰＯの活動
・地球規模の気候変化（異常気候）
・世界平和

・格差拡大と環境との関係
・日本の伝統文化
・日中間のＮＰＯ交流の未来について
・エチケット向上、文明市民のあり方、環境問題
・学校へ行けなくなった児童の話、公益活動の効果
・砂漠化対策の国際的比較及び交流

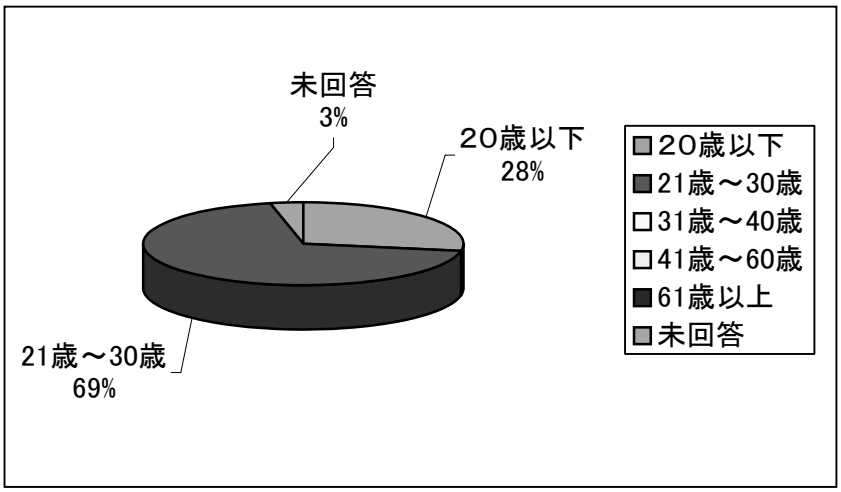
■新疆大学

0. 回答者について

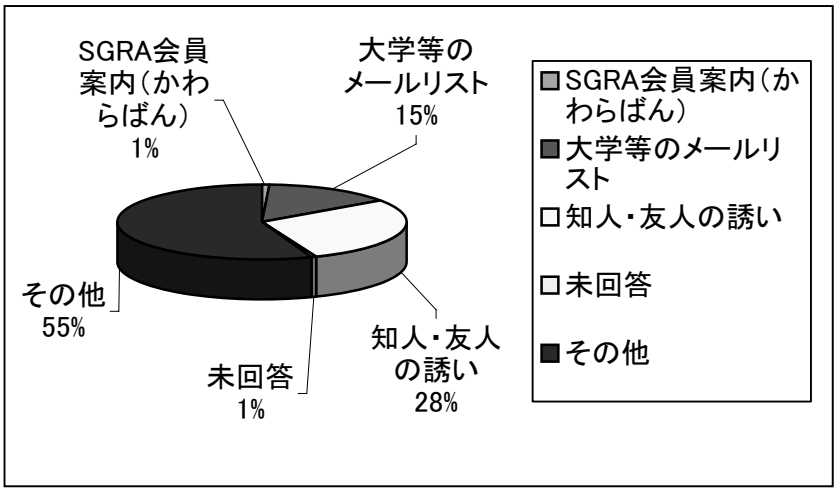
性別



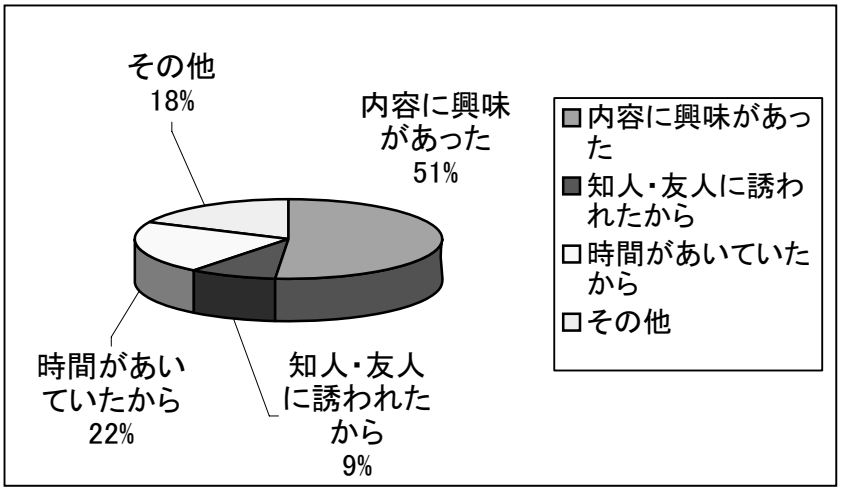
年齢



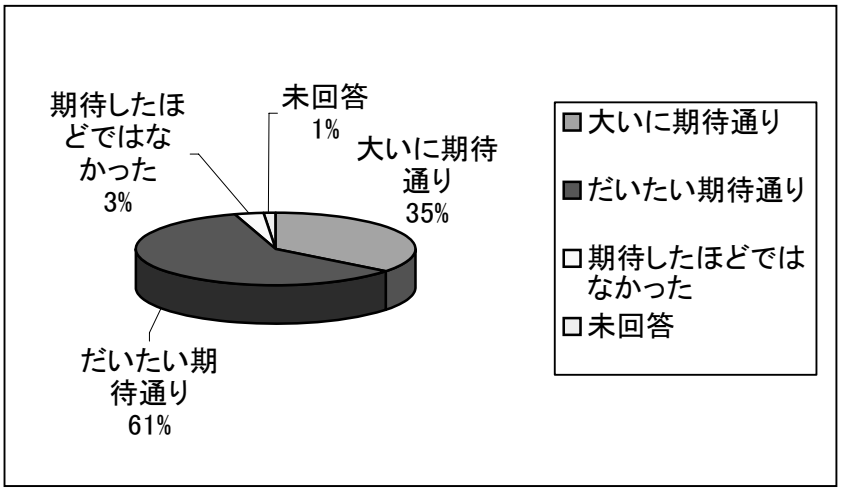
１．今回のフォーラムを何でお知りになりましたか。



２．あなたは、何故このフォーラムに参加しましたか。



３．このフォーラムは期待通りでしたか？



（理由、コメント）

【大いに期待通り】

・中国の現状についてもっと知るようになった。自分にできることが多いということがわかって、これからは環境をもっと改善していくよう尽力したいと思います。
・新疆にいる人間として、その土地に新しい衣を与えたい気持ちです。長期的な目標に向かって、皆が団結して積極的に状況を改善していくことを願います。
・大同という町における水源の重大問題および節水の重要性がわかりました。
・①まず、ＳＧＲＡの目的と貢献についてより理解できるようになりました。②将来行う仕事や研究活動について、③そして高見先生がなさってきた貢献を理解しとても感動しました。
・黄土高原の環境についてはっきりわかった。
・収穫多い。具体例が聞けてよかった。
・いままで知らなかったことを聞いた。無名英雄だ。啓発された。
・環境問題はどんどん深刻化している。フォーラムを通じてハイレベルな教育者たちが努力されていることを知り、希望が見えた。
・環境保護の大切さを知った。衝撃だった。
・講演を通じて、より高い目標を追求する大切さを知った。
・故里に帰ってＧＥＮの成果を見学する。ＧＥＮのやり方で故里をもっとよくすることができる。
・黄土高原の水不足、環境のきびしさ、植生の不足、水土流失の深刻さ、農民のまずしさなどを知り、また緑化プロジェクトの中で人々が貢献されたことを知った。
・大同の水不足の深刻さを知った。節水をする。
・以前はまったく知らなかった現地の人々の生活を心配するようになった。現状を少し知った。今後の勉強方向に影響するだろう。
・新疆について深く知ろうと思った。特に新疆の水資源について。
・砂漠化の深刻さを知ることができた。みんなの努力で現状を変えることができると信じる。
・今後何をするべきかということをわからせてくれた。ありがとう。

・環境や緑化問題の国際機関や国内外の環境事情を知ることができ、今後就職する時にも参考になる。
・環境破壊をこれ以上続けてはいけない。すべての人は「森」の意味を知る必要がある。
・中日友好の具体例を知りよかった。
・恥ずかしく思った。中国人としても中国の自然環境について知らなかった。大変大きな衝撃を受けた。
・中国一部地域の状況、水不足、ＳＧＲＡについての情報を得た。
・高原の水不足の実態を知った。水を節約しなかったことを恥ずかしく思う。今までそのような土地があることすら知らなかった。今後何かしてあげたい。
・中国環境問題と水資源のきびしさを知った。写真は考えさせられる。
・外国人の本当の考えを知った。
・砂漠化はきびしい。水資源は世界、特に中国にとって大切。
・フォーラムを通じて中国の現状を知った。
・大同の水不足におどろいた！昔のテレビドラマを思い出した。水のために命を惜しまない。
・中国の実情をもっとよく知り、いろいろと考えさせられた。日中友好を深め、環境保護を宣伝すべき。
・大同の生態、経済、農村事情を少し知った。
・内陸は緑が豊かで水もきれいというイメージがありましたが、今回のフォーラムで、そこは本当は深刻な環境問題を抱えていることを知って非常にショックを受けました。
・一言言えば感無量です。中国の一部地域での貧困や環境の悪化についてよく分かりました。社会ではいろんな人々が私達の環境のためにずっと努力してきました。私達も小さいことから環境保護をすべきです。今後このようなフォーラムや宣伝をもっと多くすることよって、もっと多くの人々がこの組織（機関、協会）を知るとともに環境保護に行動することを期待しています。

【だいたい期待通り】
・中国の高原における環境問題および都会以外の農村や黄土地方にもっと力をいれるべきだということを理解しました。
・緑化事業の発展および今後の課題が理解できました。
・昔は緑化の重要性についてあまり理解していませんでした。このフォーラムを通して、緑化と環境保護がクリティカルな問題であることがわかりました。
・農村部のきびしい状況を知った。
・植林した人は出稼ぎ労働者？ボランティア？
・言葉の問題で、講師とは交流できず収穫が少なかった。
・きびしい中国の環境問題を知った。
・都市発展の引き起こした環境問題が今後の発展をさまたげる。
・環境問題の現実を知った。現状を知った。
・よりよい環境保護の方法を知った。
・人の努力によって環境悪化を軽減、抑制することができることを知った。
・中国に貧しいところがまだまだたくさんあることを知り、水不足、人の考えが遅れているなど、これらの現状を変えなければならない。
・黄土高原の緑化のために奔走する日本の友人に感謝したい。
・土地の重要性を認識した。農民の子供として土地を改善し、農民に利益をもたらすことについて勉強する

必要がある。
・大同地区環境問題の 15 年間の歩みと改善を知った。
・水不足と貧困の深刻さを知った。今後も同じような講演を聞きたい。これからは身の回りのことから初めて、水を節約し、もったいない使い方をしない。貧しいところの人々に服を送るなど支援したい。
・中日友好を深めた。日本の皆様が中国の緑化事業に貢献されたことを知り、我々も自ら緑化活動に参加しなければと励まされた。
・大同の厳しい生活環境を聞き、近年の過度開発などのつけがまわってきたと思った。我々は現状を改善しなければならない。
・大同市の状況、たとえば砂漠化の進行、水不足、及び努力によって緑化事業が成果をあげたことなどを知ることができ、環境保全の重要性を知ることができた。
・中国の現状についてより深く知ることができ、ＳＧＲＡは国際的な友好組織であることを知り、中国への支援に感謝している。
・中国にはこんなに遅れている所があることを知って、今勉強できることを大切にしなければと思った。
・ＧＥＮについて少し知った。大同の厳しい環境を知った。勉強になった。
・環境にあった対策ということを知った。
・中国大地のもう一つの側面を知った。
・フォーラムの形で日本の方のお話で中国の直面している問題をあらためて認識した。中国で注目すべき。
・中国人の意識の希薄に心寒く感じる。8 万株の杏の木も。
・関連知識があまりなかったから、得ることがあった。

【期待したほどではなかった】
・重要なポイントが見出せない、テーマが集中してない、フォーラムのテーマを反映してない。
・生態学専攻。中日協力及び環境保護意識の向上につながった。ＧＥＮの努力に感動。環境改善の知識をもっと知りたい。菌根菌を知りたい。
・黄土高原のきびしさに関する内容は多かったが、「緑化協力」については少なかった。

４．ＳＧＲＡでは、今後も中国の大学で、民間の公益活動を紹介するフォーラムを開催していきたいと思っています。あなたは、今後どんなテーマの話を聞きたいと思いますか？

・環境改善の具体的方法、人々に与える恩恵
・環境保護
・我々の国を救う
・ＪＩＣＡの草の根技術
・日本の伝統文化
・緑化の新しい方法、民間技術、少数民族文化
・中国の環境改善策及び動向
・環境保全、及び日中友好の話題
・公益活動の成果、公益活動における日中友好
・草原と熱帯雨林について

・黄河対策、砂漠の緑化
・水不足、汚染
・日中友好協力
・新疆の動植物の保護、新疆の砂漠化、塩害対策
・希少動物に関する情報
・環境、時事、人文
・大気圏の話題、人間同士の調和
・日本人の中国人に対する理解、特に若者
・グローバル化に向けての挑戦として、個人や組織が行う事業
・「障子松」の植林によって砂漠化の進行を緩和すること
・植林、緑化、環境保護
・日本の児童教育
・既婚日本女性の仕事の現状
・日本の家族企業と文化
・中国貧困山岳地帯における学校へ行けなくなった子供の教育
・絶滅に瀕した動植物の保護
・中日無形文化遺産
・農村環境に与えたＧＥＮによる効果
・協力の中でぶつかった問題
・グローバル化に向けて若者の自由と団結について
・日中の相互理解についての歩み
・日中関係の未来およびそれについての対応
・貧困地域での事業およびその成果
・女性問題、「学校に戻った子供」、および「やっと学校に行ける子供」の問題、親のいない孤児の問題、および身寄りの無い老人たちの問題
・野生動物の保護
・どうすれば人々を環境保護に参加させることができるか
・砂漠化退治の日本の技術
・環境と人類の共存
・エネルギーと未来
・中日友好関係、世界経済発展動向
・生活に近い話題（専門すぎるとわからない）
・環境・文化財の保護
・砂漠をオアシスに変える方法、プラスチック公害対策
・西北地区の砂漠化
・環境改善に関する科学技術
・黄土高原の人々の生活と政府の支援政策
・東アジアの平和共存
・新しいエネルギーの開発

・資源問題
・日本の侵略戦争の本当の資料を集める
・老人ホームの費用を免除するなどの公益活動
・全国人民の素養教育
・資源・環境・人口問題
・気候変化の動向と原因、グローバル化対策
・飲用水問題をじかに解決する
・環境の破壊－改善－回復、当該地域の人々の意識の向上
・環境汚染
・人々の生活に対する宗教の影響
・Green Economy 持続的発展
・中日協力、中日の今後
・公徳心の育成
・温暖化
・経済・文化における両国交流の実績と将来の方向性
・日中両国における win-win 的な事業
・われわれの地球はひとつ
・多くの日本人の第二次世界大戦に対する反省
・いつ新疆で緑化活動をするの？
・環境保護に対するアドバイス、成果
・中国の民間伝統芸術の保存と伝承
・経済発展、ハイテクの社会的活用
・地球規模の環境問題と中国環境の比較
・大気汚染、温室効果
・中国西北部の砂漠化
・歴史文化
・環境－農民の収入増加、新技術が農業での活用
・新製品及び最先端科学技術の発展と利用
・年寄りを尊敬し、子供を大事にする人と人とのやさしさ、友情
・森林問題
・身の回りの小さい事からはじめて地球環境をしっかりと守る
・ゴミ処理、全世界の経済状況
・ＳＧＲＡの中国での活動に対する日本国民の考え、中日友好に対する日本国民の考え、活動期間中、中国政府は協力的かどうか
・個人として、中日関係の修復、アジアの調和発展を促進
・汚染の実態、ケース分析
・資源の利用分配とその合理性(資源浪費の減少，一次利用の制限)と再生できない資源の保護に関するもの。
・環境汚染の状況やその保護方法、また環境汚染による広い領域で伝染病の発生の予防および蔓延するときの治療方法

＜その他＞

・今回のフォーラムではいろんな話題が出てきました。最初の黄土高原の干ばつ、水資源の危機、砂漠化など問題から、日本の友人の中国の緑化事業への貢献、日中両国の関係、日中両国の人々の平和や和睦の望み、最後に中国の経済発展、物価の値上がりによる中国の農民への影響に言及した。以上のことから私達に異なる角度から中国農民の現状を理解させ、今後の方向をある意味で示した。今後、我々新疆の土地緑化に関するフォーラムを期待しております。同時に、より多くの人々に、特に各省、区、県市の行政の方に、もっと農村、農民の問題について関心を持っていただきたいです。

・私はＧＥＮが我国の大同市で行っていることに感動し、心から感謝します。この活動こそ、抜本的な解決方法を取り、緑化事業を展開することができると信じております。より効果的に地域砂漠化を防止するために、新たな干ばつや洪水の環境に耐える植物を育てれば、また人口降雨により干ばつを緩和すればいいなと思います。以前、私はずっと日本に偏見を持ち続けていました。しかし、今回のフォーラムを通じて、私は日本をより深く理解し、以前の考え方を恥ずかしく感じました。最後に、私は日中両国の人々がもっと深く相互理解し、分かり合うことを望みます。

・近年、環境が日々悪くなっており、人類は自分で自分を殺している中、ＳＧＲＡがこのようなフォーラムを通して、私達の生存環境を守ろうとしていることにすごく嬉しく思います。たくさんの人は環境が悪化していることを知っていますが、目の前の利益をしか見ないから、なかなか行動に移ろうとしない。小さいこと、ただ手を動かすぐらいのことでもやる人がいない。このことを見るたびに、悲しくなり、どうして人類はそんなに利己的なものだろうかと思う。これの主な原因は人々がまだ資源不足の生活を体験したことないからだと思います。今後ＳＧＲＡはより多くの人々を呼びかけて，我々の地球を守り、我々人類へ貢献することを望みます

・環境問題はみんなが関心を持つ問題である。環境改善は資金に制約されることが多い。環境問題を改善しつつ、経済的収入を得るというのは今後の環境問題の行方である。ＳＧＲＡと中国の大学ともっと協力し、交流し、技術的支援を提供してほしい。

・初めて参加しました。高見先生のご講演を聞いて励まされました。中国人として、まだ環境保護について何もやっていないので、この日本の友人のことを尊敬している。15 年間は容易なものではない。このフォーラムの継続を願う。

・ＳＧＲＡの全てのメンバーに敬意を表します。引き続き人類のためにがんばってください。我々も地球についてもっと良く知り、資源を大切にし、地球を守らなければならない。このような公益活動を応援する。

・大勢の人によるフォーラムは有意義。中国と外国の友情を促進する。人々の考えを豊かにする。相違や恨みを解消することもある。調和のとれたアジアを目指そう！

・提案：真の中日友好協力という意味で、我々新疆大学の学生に皆様の環境保護活動に参加する機会を与えていただきたい。中国人として、自分たちの努力で環境改善に取り組みたい。中国の環境事業のためになさった努力に心から感謝する。

ＳＧＲＡレポート
バックナンバーのご案内

SGRAレポート01　設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」
船橋洋一　2001.1.30 発行

SGRAレポート02　CISV 国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦:多様性の中に調和を求めて」
今西淳子、高偉俊、F. マキト、金雄熙、李來賛　2001.1.15 発行

SGRAレポート03　渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」
畑村洋太郎　2001.3.15 発行

SGRAレポート04　第1回フォーラム講演録 「地球市民への皆さんへ」
関啓子、L.ビッヒラー、高熙卓　2001.5.10 発行

SGRAレポート05　第2回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア:経済協力をどう考えるべきか」
平川均、F. マキト、李鋼哲　2001.5.10 発行

SGRAレポート06　投稿 「今日の留学」「はじめの一歩」
工藤正司　今西淳子　2001.8.30 発行

SGRAレポート07　第3回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える:ライフスタイルからの工夫」
木村建一、D. バート、高偉俊　2001.10.10 発行

SGRAレポート08　第4回フォーラム講演録 「IT 教育革命:IT は教育をどう変えるか」
臼井建彦、西野篤夫、V.コストブ、F.マキト、J.スリスマンティオ、蒋恵玲、楊接期、李來賛、斎藤信男　2002.1.20 発行

SGRAレポート09　第5回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義:対話と共生をキーワードに」
ペマ・ギャルポ、林泉忠　2002.2.28 発行

SGRAレポート10　第6回フォーラム講演録 「日本とイスラーム:文明間の対話のために」
S. ギュレチ、板垣雄三　2002.6.15 発行

SGRAレポート11　投稿 「中国はなぜWTOに加盟したのか」
金香海　2002.7.8 発行

SGRAレポート12　第7回フォーラム講演録 「地球環境診断:地球の砂漠化を考える」
建石隆太郎、B. ブレンサイン　2002.10.25 発行

SGRAレポート13　投稿 「経済特区:フィリピンの視点から」
F. マキト　2002.12.12 発行

SGRAレポート14　第8回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」＋宮澤喜元総理大臣をお迎えしてフリーディスカッション
平川均、李鎮奎、ガト・アルヤ・プートゥラ、孟健軍、B. ヴィリエガス　日本語版 2003.1.31 発行、韓国語版 2003.3.31 発行、中国語版 2003.5.30 発行、英語版 2003.3.6 発行

SGRAレポート15　投稿 「中国における行政訴訟―請求と処理状況に対する考察―」
呉東鎬　2003.1.31 発行

SGRAレポート16　第9回フォーラム講演録 「情報化と教育」
苑復傑、遊間和子　2003.5.30 発行

SGRAレポート17　第10回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」
白石隆、南基正、李恩民、村田晃嗣　日本語版 2003.3.30 発行、英語版 2003.6.6 発行

SGRAレポート18　第11回フォーラム講演録 「地球市民研究:国境を越える取り組み」
高橋甫、貫戸朋子　2003.8.30 発行

SGRAレポート19　投稿 「海軍の誕生と近代日本－幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」
朴栄濬　2003.12.4 発行

SGRAレポート20　第12回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力:COP3の目標は実現可能か」
外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊　2004.3.10 発行

SGRAレポート21　日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」
2004.6.30 発行

SGRAレポート22　渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争－どうして起こるのか どう解決するか」
明石康 2004.4.20 発行

SGRAレポート23　第13回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」
宮島喬、イコ・プラムティオノ 2004.2.25 発行

SGRAレポート24　投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助:その評価の歴史」
フスレ 2004.10.25 発行

SGRAレポート25　第14回フォーラム講演録「国境を越える E-Learning」
斎藤信男、福田収一、渡辺吉鎔、F.マキト、金雄熙 2005.3.31 発行

SGRAレポート26　第15回フォーラム講演録「この夏、東京の電気は大丈夫？」
中上英俊、高偉俊 2005.1.24 発行

SGRAレポート27　第16回フォーラム講演録「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」
竹田いさみ、R.エルドリッヂ、朴栄濬、渡辺剛、伊藤裕子 2005.7.30 発行

SGRAレポート28　第17回フォーラム講演録「日本は外国人をどう受け入れるべきか-地球市民の義務教育-」
宮島喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴校熙、小林宏美 2005.7.30 発行

SGRAレポート29　第18回フォーラム・第 4 回日韓アジア未来フォーラム講演録「韓流・日流:東アジア地域協力におけるソフトパワー」
李鎮奎、林夏生、金智龍、道上尚史、木宮正史、李元徳、金雄熙 2005.5.20 発行

SGRAレポート30　第19回フォーラム講演録 「東アジア文化再考－自由と市民社会をキーワードに－」
宮崎法子、東島誠 2005.12.20 発行

SGRAレポート31　第20回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合:雁はまだ飛んでいるか」
平川均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範建亭、白寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F.マキト
2006.2.20 発行

SGRAレポート32　第21回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか－留学生－」
横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラパーブ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、角田英一 2006.4.10 発行

SGRAレポート33　第22回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」
小菅信子、李恩民 2006.7.10 発行

SGRAレポート34　第23回フォーラム講演録 「日本人と宗教:宗教って何なの？」
嶋薗進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャナ・ムコパディヤーヤ、ミラ・ゾンターク、セリム・ユジェル・ギュレチ 2006.11.10 発行

SGRAレポート35　第24回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ行くの？～」 鈴木進一、間宮尚、李海峰、中西徹、外岡豊 2007.3.20 発行

SGRAレポート36　第 25 回フォーラム講演録 「IT は教育を強化できるか」
高橋冨士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇 2007. 4. 20 発行

SGRAレポート37　第1回チャイナ・フォーラム in 北京 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」
池崎美代子、武田春仁、張潤北、徐向東、孫建軍、朴貞姫 2007.6.10 発行

SGRAレポート38　第6回日韓フォーラム in 葉山講演録「親日・反日・克日:多様化する韓国の対日観」
金範洙、趙寛子、玄大松、小針進、南基正 2007. 8. 31 発行

SGRAレポート39　第26回フォーラム講演録「東アジアにおける日本思想史～私たちの出会いと将来～」
黒住真、韓東育、趙寛子、林少陽、孫軍悦 2007. 11. 30 発行

SGRAレポート42　第2回チャイナ・フォーラム in 北京＆新疆講演録「黄土高原緑化協力の 15 年―無理解と失敗から相互理解と信頼へ―」 高見邦雄 日本語版、中国語版 2008. 1. 30 発行

☆ レポートご希望の方は、SGRA 事務局(Tel:03-3943-7612 Email:sgra-office@aisf.or.jp)へご連絡ください。

☆ 「SGRAかわらばん」無料購読のお誘い

・「SGRAかわらばん」は、SGRAフォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週2回(火・金)、電子メールで発送いたします。どなたにも無料で購読していただけます。
・配信登録・解除をご希望の方は、お手数ですがSGRA事務局までご連絡ください。
・ご登録いただいた方は、SGRAメール会員となり、「会員用」ホームページから、SGRAレポートのバックナンバーをダウンロードしていただくことができます。

ＳＧＲＡレポート　No.0042

第２回ＳＧＲＡチャイナ・フォーラム

「黄土高原緑化協力の１５年―無理解と失敗から相互理解と信頼へ―」

編集・発行　関口グローバル研究会（SGRA）

〒112-0014　東京都文京区関口 3-5-8（財）渥美国際交流奨学財団内

Tel：03-3943-7612　Fax：03-3943-1512

SGRA ホームページ：http://www.aisf.or.jp/sgra/

電子メール：sgra-office@aisf.or.jp

発行日：2008 年 1 月 10 日

発行責任者：今西淳子

印刷：藤印刷

ⓒ 関口グローバル研究会　禁無断転載　本誌記事のお尋ね並びに引用の場合はご連絡ください。